

ろでそれだけでは正體は判らぬ。之を現代の音に比べ、その具體的の綴音まで指示して始めてその音の價値が認めらるゝことになる。それがよしんば古代音との比較に及ばないまでも、その字音變化の分布が明確にされただけでも、今日の字音現象の地方色がかつきりと擱めて來る。それがため字音から見た漢字の全局面と云ふものが明るみに出されることになる。

從來日本では字音の方面は音韻として韻鏡の側の研究か、さもなくば一東の韻、八庚の韻などと押韻作詩上の必要から來た傳統的の調べがあつただけで、その本質からは研究せられなかつた。又子音母音を含む綴音や四聲の方面までもところは研究せられなかつた。況して言語學の立場から現代語と比べて字音の研究に入る方法などは採られてゐなかつたやうに思ふ。この方面の研究に始めて手をつけ、その後幾十回となく出かけた翰墨行脚により各地の方言音に注意して見たので之によつてその地方音を益確かむることが出來た。そこで茲に之を一段と力強く學界に提供するとなつたのである。本書が字形の研究よりも寧ろ字音の方に重きをおいてゐるのは蓋しこの邊に聊か從來の研究を補ふものあるを信するが故である。しかしさは云へ本書は自分一個の地理的調査を本にして研究の一斑を縷述したものであるから、後世又支那研究に没頭する學徒の出現して更に之を補正し又より新しい研究法によつて一層進域を見せてくるゝものあることを期待してゐるわけである。

こゝに研究指針として我が思ふ處を更に附言せしむるならば支那のこの側の研究は單なる重箱の隅

をはじくることばかりを研究の能事と心得てゐてはいけない。心から支那の文字なり音韻なり書道なりに就いて之を鑑賞しその味の奥深きに陶醉すると云つた境地を持ち得ないことには甘味のある雅致は出ないであらうと思ふ。たゞ支那のことは顯微鏡的に分解又分解で細かく科學的に行けばかりが藝ではない。分解だの綜合だの色々な研究方法を盡して見たにしても更に到達し得ない一種の幽玄味を感受する。そこには科學の世界よりも一段高い幽玄な天地の残されたものがあることを認むることが必要なのである。老莊の思想は正にこれを示したものである。文字の形音義くらゐの處は唯それに行く途中の徑路を説明するに過ぎぬ。音韻の事がいくらくも闡明せられ、微細に判つたと云つても、音曲による支那の雅樂の優、文武劇に見る美と云ふものゝ世界は又別である。之を心から鑑賞するものと研究するものとは一致することがあり、又一致しないともある。學問や研究は出來てゐても幽玄の天地は又おのづから別であることを最後に斷つておく。これはその境涯まで來た人でなくしては共に語ることが出來ぬ。理屈だけは判つても鑑賞し陶醉し得ない人の澤山ある事實によつてもこれは判然と鑑別せらるべきである。

### 三 文字教育の指針

文字研究の應用方面として、國家社會の全面に最も影響の大きいものは教育に對する關係である。

日本の教育界に文字の重要視せらるべきは、日本の歴史を心得、東洋文化の精髓を知れるものには説明をする必要もないのである。文字の研究が進めば進むほど之が教育上に深き根を有する所以がこゝに理解せられて来る。

文字の深き研究は文字の古典研究としての重要性が認めらるゝわけであつて、それがいくら三代の古きに遡つても之を以つて支那文化史の研究の上のみ大事なことでは日本に必要なものゝ如くに見るとはよろしくない。その淵源の古ければ古きだけそれだけ文字文化の神々しさも彌増しに増して来るものであると見なければならぬ。

日本の兩假名の如くその單に日本に来てから生じたものであるならば日本式に之を取扱つて抵觸する要はない。けれども日本の漢字にしてその渡來以前支那の本場で久しきに亘る歴史を經、その沿革史上で系統上どこまでも正しく傳はり來たれるものは、その傳統的慣例により我が國にても之をそのまま使用普及せしむるを常道となしてゐる。字形の書體に於いてはその社會的慣用形がそのまま傳へられてゐるのでこゝは首肯せらるゝのである。字義に於いても大體さうなつてゐるがひとり字音の場合には、言語の相違と地方的の差又時代の變遷による慣用音の差が甚だしい爲め形のとぎのやうには行かない。形音義はそれ〴〵日支間に特殊の事情のありて形は同一なるも音義は一致しないと云ふものがかなり生じてゐる。一概に日支同文同種のモットーを振り回はすものあれども日本音を以つて支那の

人に話しかけても通じないのが普通である。チャング・チエー・シーが日本人の耳に判らず、又チャング・シエー・ランが日本人には見當だにたつかなくとも支那の人にはそれ〴〵前者が蔣介石であり、後者が張學良その人であることが誰れ人にもわかつてゐる。字形の方は同一であつても、音となるとこれほどまでに隔りを生じてゐるのである。

文字研究から教育上に最も力強く考慮してゐてもらひたいものは字形筆畫の問題である。今日、日滿支三國の東洋文化發揚の目的から云ふときは固よりのこと、彼我の國交、日常の往復、相互の理解の上に於いて字形筆畫の同一なるはさながら三國鼎立の強みを有することゝしても考へられる。滿支兩國がその文字を國字となし民族文字となして動かさない以上、日本も亦之と足並をどこまでも揃へて三國共に文字問題に關する限りは相互泰山の安きに居るの覺悟を有すべきである。

教育上に於いては從來永年に亘り漢字の兒童修得上に關して難易の論議があり、時には論究の輩出して、鎧袖一觸大いに鎬を削りし事もあつて日本の國內だけでも随分やかましい問題として持上つたこともある。

しかし自分は本書に記述し來たつた研究の結論としてどこまでも文字は系統的に之を教育上に適當するやうまとむることが出來得べく、又之を適當に削減蠲梅することもむつかしいとではなく、その人にして適任者さへ得るならば寧ろ興味を起さしめ、幾百萬の兒童に修得せしむるの緒をつかましむ

ることもむつかしくないこと、信ずる。

支那文字を支持し、支那文字運用の過去、現在、將來を發揚することは日支滿三國の東洋人としての責任であり、又東亞の和平福利増進の上の樞機でもあると信ずる。世には今日この世界環視の東亞の重要地位を占め亞細亞のリーダーとしての名實相具備して日本のインテリ階級にあるものが強ひて漢字を廢止して日支滿鼎立の漢字國中から自ら脱退せんとするの愚を學ぶものすらあるを見る。これが帝都教育界の一角にあるのを耳にするに至つては驚かざることを得ない。次には漢字の教育に對する最近の私見として特に國定讀本の小學兒童に關したものを補入しいかに一般日本國民の之に關心多き性質のものなるかを指示しておく。

#### 四 教育上の漢字問題

報知紙上に松阪忠則氏の新しい小學國語讀本の漢字についてと題し、頃者時事に即したキビくした高見が見えた。

最近教育界の一角に漢字廢止論の擡頭して來て、盛んに反漢字運動のある風評を耳にしてゐる際のこととして、自分は人一倍この記事に關心を持つて再讀し、あはせて小學教育に、文字の進歩、文字の生命、文字の時代化に關する認識の必要なることを痛感するに至つた。もとよりこの文字の問題は官選の教科書から出でゐるからこれを必要とするのだとか、一論者がこれを指摘するに至つたからこれに拍車をかけるとかいふのではない。いつの時代にも、またいづれの社會にもその文字を使用してゐる事實のある以上は萬古不磨の原理であるところからこれを述べるのである。

高所大所から日本今日の實用漢字を見渡してみると、こはすべて支那の文字といふよりか、日本の漢字となつてゐると見てよい。といふのは、

一、その字形、字音、字義が今では日本の國民性にピッタリ融合し、これに國民の血液も神經も感情知識もすべて緊密に結び付いてゐる。殊に自己銘々の姓名文字にしてもこれがカナやローマ字で以て表示せられたときの意識とは全然變つた感じを以てこれに關心が持たれてゐる。

二、また漢字の有する音と意義は正しく日本語にピッタリ來る聯繫を持ち、日本精神、東洋文化、臨時議會、在滿機構などといへる言葉にしても遺憾なくその表示する文字からその音のひびきと意味の内容が指示されてゐる。

漢魏、六朝、隋唐以來、大陸の文物制度は幾度かの浪によつて我れに採入れられてゐるが、その我れに適しないものならば受入れずこれを採らない。また採り入るゝにしても形を代へてゐる。その國情本位に海外の文化を採入れ、集大成することに特殊の技能長所を有してゐる日本人は、かなり機敏にこれを消化しまた日本化してゐる。つまりは我れの肉となし、血となし、いはゆる和魂漢才の立前

で以て近世史に至るまでの我が文化を發達せしめて來た。

文字の問題に關する限り、今日さうそのやかましく詮議立てをして見なくともよい。大抵その日本で用ひならしそれが便利せられてゐるやうな文字は、支那でも隋唐の頃既にちやんとその字の慣用形が出來て用ひらるゝに至つてゐる。これは唐の干祿字書でもひもといて見るならば、當時の實用文字の正俗誤などはつきり指摘せられ一目瞭然となつてゐるのでわかる。爾來今日に至る一千有餘年の間、文字の進化したあと、我が國特有の慣用とを勘定の中に入れて考へるときは、國民の血となり肉となつてゐる文字のことであるのだから、これが國民の使用に堪へらるゝやう便利にこなれ、日常の筆書に印刷にと活用せらるゝは當然のことである。それが小學兒童に教へ込まるゝにあたり尙更そこに心して採録せらるべきはいふまでもない事である。

學校の實際教育にたづさはつてゐる先生ともあらうものが昨今猛烈な漢時全廢論の運動宣傳に憂身をやつしてゐるのは、一つは趣味と體面から今では止める譯に行かなくなつたのでもあらうが、また一つにはこの極端に複雑な小面倒臭い漢字並びにその用法上の煩鎖極まりなきことが國民の能率を低下せしむる事甚大との堂々たる立前の下に敢行せられてゐるのだと思ふ。由來支那の人はどのやうなこまかい事物に對してもこれに一々稱呼を與へ、その名稱にまた文字を當てる習慣を有つてゐる。これは赤や青を示す色の名前に對しても大變な區別の立てられてゐるのでわかる。この一事を以てしても

文字關係の複雑性が充分汲みとられる。しかしそれは支那方面の場合をいふのである。日本人は日本人獨自の立場から日本式の慣用で行つて少しも差支へない。

かういふ見方とその態度をとることは誰にもわかり切つた話しなだけではあるが、小學兒童と文字の事を考へる場合にいつも土臺となるものである。であるから、順序としてこゝに述べておくわけである。源は遠く流れは長い字の事であるから、いくら支那から傳來したものといつてもその間に系統秩序の一条亂れざるものも存してゐることであり、あるひとはとくに碎けて大衆から受入れらるゝやう平明な形になつてゐるものもあり、また類推で以て覚えやすきやう略形になつてゐるものもあるのである。

淡白にいふと、日本人や、支那の人は、文字表現の事實に格段の氣持をかけ、筆蹟に活字に上さるゝ時はこれから一種の重壓を感じたり、非常な感激を受けたりする處がある。そのためであるといふかこれを心から八釜しく考へるものは國の憲法を仰ぎ見る如き氣分を以て接する。しかし元來いふと文字はその國民なり社會人なりが日常生活を營む上に心安く使用すべき者である。言葉の符牒として誰しもが相互にすらすらと使ふべきもの、いはゞ出來るだけ親しみの情から取扱ふべきものであることを含んでおいてもらひたいのである。

新しい國語讀本三の卷、浦島太郎の處を見ると『子どもが大ぜい集つて、何かさわいでりました』と

ある。この集の字のことを考へて見ると、かなり古い時代からこは慣用形として行はれこの簡単な姿にまで變化したのである。またこれ位なやさしい形でなければ到底やりきれないのである。

といふのは、この字の生ひ立を遡つて調べて見ると初めは、木の枝に澤山の鳥（佳フルトリ）があつまつてゐた形に出来てゐたものらしい。そのためか、説文解字といふ一千八百年程前に出来た字書の中には、トリが三羽木の上に集まつてゐる形に書かれてゐる。その頃の字形を楷書にかき直して見るとかうである。

#### 彙……………集の字の古體

この構造は鳥の集まつてゐる處を示すのが、元來の意味である。浦島の處の文章には子供の集まりといふことに用ひてあるが、その適用の對象は何だつてよい。またその初めの字形はやゝこしく複雑であつたから鳥の數を省いて一羽だけ残すことにした。一羽の鳥であるに集まるの義が含まれてゐるのかかるいはれ歴史があるによるのである。その典據を指示する事はこゝに省いておく。

また同じ讀本卷三の中には

#### 買賣の二文字

がある。賣るにも買ふにも、上古の支那の風習としては貝（財貨、貨幣の義）が用ひられてゐた。貯へるのも貝、賊をするのも貝がほしいため、最良筋へ與へるのも貝、これを分けると分貝で貧の字と

なるといつた調子にすべて貝の字が後世の金錢に當るものであつたことがわかる。買の字はその貝（貝貨）を網でおほうである形の崩れた形から出来たものである。がいまその古形は省略する。次には

#### 私の字

である。これも讀本卷三に見えてゐる。私の字に見る禾（稻）は、自分の所有するものであるとして禾のわきにム印をつける。公平に分つときはそのム印に八の字を加へる。八ムで公となす。公の反對は私有物即ちそれは私といふことになる。こは租の字、税の字を見てもわかる通り、古は税金に禾稻が用ひられてゐた。そのため禾がかやうに重要視せらるゝに至つたものである。

こんな風に、集の字、買の字、賣の字、また私の字、公の字を説明して來ると、誰にも腑に落ちるやうに字形の組立てが覺えてもらへる。羊の大きいのが美しいと思はれ喜ばれてゐたか。羊と大とで美の字が生れた。これは義の字、善の字など、併せ考へるべき文字である。なほ卷の三には音の方からいふと、七（シチ）の音のしるしによる切の字があつたり、且（シヨ、ソ）の音による助の字が見えたり、亡による忘の字があつたりする。また弘の字と、虫（ムシ）とで出来てゐる複合の文字

#### 強の字

などもある。なほ工から出来た空の字、肖から出来た消の字の思ひ出されるやうな例も出されてゐる。

こゝには文字の歴史や、沿革を述べるのが主ではないが、文字の生ひ立、起源を云々して來ると、

先づつとこのやうな趣味のある話が出来。之を挿んで見たゞけである。ところで讀本の中にはまた、切(セツ、サイ)とか助(ジョ)とか音のしるしのある者をもあげてゐる。切の俗形に土を扁にしたり十を扁にしたりしたものもあるが採らず。嚴としてその七を扁にとつた古形を示してゐる。助(査も兄弟字)にしても似て非なる俗な形になる扁があるがそれは排斥してゐる。また強の字に弘の存在、その虫の上にムのおかれてゐるところ。俗形の口をそこにおかなかつたところはかなり典據に基いた考への現れであるといへる。次に

## 青の字

は上半は生でこれが青と關係の密なることは篆書の知識を有するものならわけなく解せらるゝことなるも一般にはわからぬことゝしておく。

これら字源方面の知識を本にしてすべての普通字を解いて來るならば、インテリ階級の文字に興味を有するの士には、相當字形字畫に關して印象を深めらるゝことであらう。實際の教壇上に立ち頭是なき童男童女を前に白墨を用ひ、その説明をしてゐらるゝ教師諸君にありては、これをどの程度まで教へ込み、どんな風に面白く覚えさせるか。どのやうにするか。それはそれゝその人の腕と、その人の文字趣味の有無如何によることゝ思ふ。漢字の全廢を高調せる極端なる運動者はこの邊の消息についてどう見らるゝか、その見解と、それに對する態度、身の振り方は自由であらう。が今日

の日本に反漢字論者のある空氣に鑑み、多少とも趣味のある覚え方、また面白き教へ方といふものが一應研究せらるゝの必要はないであらうか。こゝには冷靜の態度で以て識者にはかつて見たいと思ふのである。

日本精神だの東洋文化だのいふものゝ本當の内容を檢討して見ると、容易に西人などの認識しがたい幽玄なところがある。その因縁來歴を本當に理解させることはむづかしい。若しそれ古い歴史上のいはれになると、そこにはたゞならぬ事情の伏在してゐて、それが大變な底力を以て今日に推移してゐることを知るのである。

小學兒童用の讀本の中に入れられてゐる漢字の如きも、その文化の産物の一つであると思はれる。それが日本に這入つた以上それは國字であると、我が物顔にうそぶいて見たところ、既に支那にあつたとき、それが十分もまれもまれて、可成り洗練せられてゐる。三千年五千年の鍛練を経てゐる文字なのである。その間の經過の道程、沿革が日本の兒童教育の上に多少とも應用せられ、採入れらるゝ事が可能であるならば必ずしもこれを嫌ふ必要はあるまい。過去の文化の長を採入るゝことにやぶさかであつてはならぬ。それもしかし程度問題で、あまり極端なものゝ一般から思はるゝものは考へものである。これについて讀者はどう思はるゝか。二年生の文字で、また

間の字(もとは門に月)

がある。自動車の話の處に出てゐる。これはもと支那土郭の家の門に扉のスキマから月かげがさし込む處の意を示したものだ。丁度門の戸に耳を當て、立ち聞きする處から、聞の字が出来たのと似た心理で生れたものである。また門に口を當て、訪ぬる處から問ふの字が生れてゐることも面白い。これらは皆いはば兄弟字なのである。ところで今の學校の先生や、兒童がこのいはれを知つてアヒダといふ字を書いて呉るれば譯のない話であるが、果してそれは期待せられるかどうか。無理押しすべき性質のものではない。一般活字では問の字は月でなく、日が這入り、問となつてゐる。昭和の今日、問の字にわざ／＼月を入れさせるのはチト無理でないかと思ふが、讀者はどう見らるゝか。

宅に九歳の女の子（昭子）があつて小石川竹早町の附屬に行つてゐる。讀本に

買の字 賣の字

のあるを書取るとき、一二三四の四の字をその中に入れ、よいつもりであるたら、先生から直されたとのことである。三千年前のいはれを楯にとつていふと、買と賣は兄弟字。讀のツクリはまた別字である。しかも買讀の兩者は更に四の字と關係のない字なのである。簡単にこれをいつて見るとざつと

四、

買(讀)

賣(讀)

の違ひがある。起りは相違してゐるが、後世支那でも共通の形に統一され、頭を惱ましめない事になつてゐる。こゝには強ひて逆轉を非難する積りではないが、事實上統一の形を考へるとしたらどうだ

らう。もつとも學者になる者はこゝに例外とする。

また讀本卷三を見ると縦棒のハネたものに

水、手（例外、木、東、來、茶、私、集）

がある。字源からいふと水にも手にもハネる理は少しもない。木や東、來、茶などの棒をハネるのを誤認するのは、少々酷であるやうな氣もする。それから

年の字

である。こはもとは禾と千との複合されたものから來たものである。讀本にはこの字の中央の點を縦に打たないで横に引いてある。こは活字體と違つた行き方で、復古思想の現れであると見らるゝ。また點の話になると、今一つ

丸の字

がある。丸が九の字と楷書の上で違ふのは始めのノをメとするにある。それを字源の上から中央の空間に靜かに打たせることにしてある。戦戦兢兢、薄氷を踏むが如き態度を子供にとらせる心理が見らるゝ。

青の字

これも氣樂に從來は、朋、鵬、月、有、朕、勝、胃、冑をすべてまとも無差別の形で、と點を打た

せてゐたものである。源に遡れば青の下半は丹の字であつて、外の貝錢をつるした形(朋)、鳥の羽(鵬)、舟の形(朕、勝)、肉の形(胃、有)、月の形(明、朔)、あたりのものと確然區別を立つべきものかも知れぬ。學問上の問題なら有の字の下半は肉を手にする義なることを主張もしなくてはならぬ。けれども教育上には、これら五六通りの別は撤廢してやる方がどんなに助かることかわからぬ。それも幾百萬の童男童女がそれを突破して趣味深く書きわけてくれる見込があるなら別だ。朝の字の右半は點點(水流)であるに有の下は點でなく、青の下はまた違ふなどいふに至つては到底煩に堪へぬことである。

尋二の讀本新字で誤りやすいのは、歩の字の下半に點を加へて見たり、直の字の初めを $\text{ㄥ}$ としたり下を一にして見たりすることである。しかしこれも強ひて誤りとすべきではない。それも數學のやうに、微細な點に注意力集中の目的から止むを得ぬと抗辯せらるゝなら、また自分は何をかいはんやである。冷靜な態度で一般社會人並びに家庭の諸君に高教を仰ぎたいと思ふ次第である。

## 附 録

### 支那文字音韻言語に關する參考資料

#### 一 資料の蒐集

凡そ學術の研究上で參考書の採りかた位際限のないものはない。研究の方法次第では甲の棄てた參考書が乙には無上の參考書となるやうなことがある。又經學や史學や、文學その他博物などの方面の資料が存外、此の文字音韻、言語の參考になることもある。又諸外國の文字研究書が牽いては支那のそれに他山の石となることもある。かやうに見て來ると一學問の研究上に參考書は多々益用を辨じ得るわけである。

然し支那幾億の書籍中嚴密に云つてその文字、音韻、言語の良參考書を選定することは、決して容易なわざでない。これが選定分類の事業はこれだけでも一研究たる價値がある。うつかりはまつて居ると此の準備事業の爲めに一生を畢へてしまふ。著者は唯茲に本書の内容と直接關係のある參考書特にそのうち主要なるものだけを選定し、餘は草稿の時過半塗抹してしまつたのである。中には分類の



釣り合ひ上遂に割愛したのも少なくない。書目蒐集次第は我が東京帝國大學附屬圖書館に在るものを先づ本に取り、交ふるに帝國圖書館の書籍を以つてし、尙漏れたるものは内閣その他一個人の所蔵に係るもので確實なるものを採ることとした。此の目録を作るに就いては初め東亞同文會に着手せしものを快諾を得て引き継ぎ、爾來出來得るかぎり日々原本にあたつて引照することにつとめ、その分類に就いても再三校を改めた次第であるが尙分類上多少統一を缺ける點、順序に前後せるところなど權焉たるところが少なくない。説文各種本の如きもと形の部に入るべきものなるも形義兩方に關するものは之を言語の部に入れることとした。

尙こゝに文字の研究に従事する學者が特に留意してゐて欲しいと思はるゝ點は、その單なる刊行物や古拓、寫眞による計りでなく、更に實地にその文字を生み出してゐる支那の土地そのもの又その地の風物各般のものを味ひ考ふることを忘れないやう資料として之を採入るゝことは是れである。從來の學風は單に文字の上に見えた古人の苦心とか先人の研究とか云ふ方面のもののみを重く見、之を涉獵するを以つて能事了れりとなしてゐた。自分は本書の第一版を二十六年前に出してから今日に至るまで機會ある毎に氣がらく渡支漫遊を試みてゐるが、その間得たる文字體驗文字行脚の内容は相當溜つてゐる。これらは別の機會に公にする心組みであるが時には遠く分け入り、河南から山西、四川の穴居部落を訪ねて、その堯舜禹以前の太古結繩の民がなした生活振りを髣髴せしめてゐる穴居の民と語

つて見たり、或は巖窟内に住む道士や仙人を訪ねて、その元始狀態からこの字象形の意匠を聯想せしむる資料を得て見たりしたものがある。或は山麓江邊の野獸の棲息狀態から、上古の民の文字描寫を思ひ付いたと思はるゝ徑路などについても考へさせられたことが少なくない。

又文字行脚の途次思ひついて、説文解字の著者後漢の許慎の墓は、今いづこにとあたまを向けて見る。固より千八百年の古のこととて、之を訪ぬるに由なきも、北のかた、山東曲阜の聖廟に參ると夫子の靈龕に隣して配せられた、許慎の神位をさがし出し之を拜し、斯文在茲、萬世師表の勅額の下で文字尊尙の雰圍氣に浸つて見たりなどする。又説文の注釋に生涯を打込んだ段玉裁が文字學上に貢獻をしてゐる事は有名な話であるが、いつも出かくる江南の旅にはその途次、自分が五十一歳の誕生日を記念して昭和六年四月十六日に江蘇、金壇の古城を訪ねて見た。リーヤン(溧陽)王母觀から舟行し、段氏の故里、金壇に遊び、城内の古廟に參拜して、アールリン(珥陵)から丹陽に出た時の行脚の印象など殊に自分には懐かしきものがあるのである。段注説文の紙上に見る金壇の文字を特に江蘇の廟門に来てこゝで見ると、こゝは何たるゆかしい事であらう。金壇の茶樓、飯館に入り、老爺と文字をしみじみ談するに、何となく段氏の後裔でもある哉と云つた想像が胸を突くのである。

又支那は奥深く僻地をあるいてゐるうち、宜昌の城内に、泉貨の形した帽架を得て見たり、四川重慶、江安、叙州の水郷に舟の字の元始形をした舟を見つけたりなど、今日の土俗慣習の中から獲らる

所のものは決して少なくない。或は遠く南して香港の旅に花屋の先の處の古本屋を漁つてゐてそこで五十七八年前公刊されたデニスの著、廣東語の方言の珍書

A Handbook of the Canton Vernacular of Chinese Language by N. B. Dennys. M. R. A.  
S. & C. 1874

を掘り當てたこともある。東京にゐて西儒耳目資の寫本を桂湖村翁の處で拜見したり、空海の篆隸萬象名義の蟲のくつた古本を帝室博物館の棚の中で見付けたり、高田、河井の諸先輩と文字圖書談を交はしたりするのも、勿論そこに啓發する所の大なるものがあるのであるが、又かうした各省各地の都城に開港地に、又日本人のあまり行つてゐない奥地に文字行脚を恣にしてゐるのも獲る所がかなり多い。積古齋鐘鼎彝器款識を著した文選樓主人、阮元は江蘇イーチン(儀徵)の人であると聞き及んでゐるが、そこは船でいつも寄港してゐるだけで、未だ上陸したことがない。従つて土地で阮元のもので見た経験は持つてゐない。しかし山西省は太原城に遊びに行つたときのこと、明末清朝に渡つてこれは書道の方であるが、有名な傅山の書幅大軸の随分澤山あるのを見たことがある。土地の醫者であつただけに、何と云つても、その郷里の關係からどつさりそこに残されてゐるのは當然である。文字資料もあさり方であるが、かうしてその地方地方のローカル・カラーを味ひつゝ、暇にあかせて涉獵してゐると、本當に行届いたものが面白く得られる。

吳大澂の説文古編編は、人のよく知る處であるが、誰れでも山東の泰山に行くと、金剛般若經の磨崖碑の谷で遊んで更に中天門(伏虎門)まで攀登すれば間もなく路傍の蟠岩の面に、吳大澂みづから五尺大の繪文字で見事に虎の字を刻りつけ之に署名してゐるものがあるを見る。その近くは水流のない處で之を手拓するには随分骨が折れ、二三の人手をかりて辛くも之を拓し了へたのであつた。文字資料もかうまでして一々拓本をとり、蒐集して見ると徹底する。金剛般若經の如きにしても、自らその經石碯まで降つて行つて、そこであちこち手拓に従事してゐる子供を相手に、朱拓や墨拓の話などして見たり、又時には自分でボンボン拓して見たりすると、氣に入つた名拓も出来るのである。でも泰山の拓本は矢張りあの無邪氣な子供にそのまゝ敲かせておく方が大陸氣分が出る。吹きおろす風に吹かれつゝ紙をおさへおさへやつて居るあの光景は一入の興味が峻らるゝ。幾千幾萬の文字研究書はどうして一々みづから出かけて行かれよう。さう云ふ譯にはいかぬ。けれどもその幾分かはかうした文字行脚のうちに少しは苦心をして見る。或は時に長沙までも出かけて行つて、曾國藩や、曾紀澤のものを集めて見たりする。又四庫全書に資料を提供したと云はるゝ浙江、寧波城内の范氏の故宅を尋ねても見る。すると丸で狐狸の巢よりもひどく荒れ果てゐるのを見て少々驚かされるのであるが、さう云ふ事實も人の話だけでは判らぬ。實際を知らぬものは嚴然と范氏の昔しの進士第がそのまゝ残つてでもゐるやうに云つてゐるが決してさうでない。扁額や對聯は徒らに掛かつてゐるが、蜘蛛の巢

がかゝり踏み込めたものでないのである。さう云ふ事が行つて見て始めてまのあたりに目撃せられるのは嬉しい。そこに資料あさりの興味も湧く。

文字資料の蒐集は、かう云ふ風に半ば行脚気分から風物に親しみをもつことである。懐かしい情趣を胸に抱いて出かけると云ふ風でないと失望する。見當たればよし、見當らなくとも游歴欲が満足させられたと云ふので、それで埋め合せがつく。その氣持でなければ續かない。本書に掲ぐる参考資料は固より研究資料を目標にして集めたものである。若し之を寺小屋方面で知られてゐる千字文、三字經、百家姓の繪入りのものなどから家庭兒童用の益智圖節本 (四冊本で別に、圖版の板がある) (童大年題) と云つたものまで採入れて考へるとよほど數量を増すわけになる。その益智圖の文字として取扱はれたもの、一例をこゝに示して見るとかうである。十五の板片で以つて文字が組み立てられ又器具調度から動植物人事に及んだものが取扱はれてゐるのである。即ち、

一、文字の方では

益智 正心 修身 克己 復禮 明月 直入 清風 君子 德松 柏古  
神仙 多情 多佛 心開 張

二、器具の方では

書硯 筆洗 龜紐印 漁鼓 拍板 洞簫 書燈 麈尾 禪椅 茶甕 鏡奩 煎刀 管鑊 鐵搭

鬼臉 馬燈 石牀 風輪 篋筒 地鈴 撲滿

三、動植物の方では

獐豸 白燕 喜鵲 鰻魚 靈芝 萬年青 荷花 拂手 荔枝 香櫞 葶藶 五色瓜

四、人事の方では (圖解を省く)

車武囊螢 鑿壁偷光 隨月談書 蕪武牧羊 圮橋進履 秦臺跨鳳 山陰換鷺 孤山放鶴  
虎溪三笑 賞雨茆屋 一琴一鶴 叱石成羊 騎牛過關 漁婦曉粧波作鏡 西施昔日浣紗津  
月明林下美人來 獨上江樓思悄然 月光如水水如天 滿階梧葉月明中 江湖浪跡一沙鷗  
山外青山樓外樓 吹角當城片月孤 問柳尋花到野亭 夜扣禪扉謁遠公 一點禪燈照十方  
不脫蓑衣臥月明 清池皓月照禪心 人跡板橋霜 振衣千仞岡 門對浙江潮 躡足萬里流  
獨釣寒江雪 挂席拾海月 舉杯邀明月 折梅逢驛使

何と云ふ雅な文字游戲に見る名句ではないか。これらは板片で組み立てた圖解と共に説明して來なくては本當の興味は湧き起らぬのであるが、ともかくこの字の家庭游戲に漾ふ風韻の一斑は之で以つて推知せらるゝであらう。かう云つた益智圖板を用ひて試む文字の遊びや、又その名句を象形の上に現はし作ることの遊びは決して生まやさいいことで出来るものでない。立派に文字音韻の研究以上の苦心がこゝに要る。唯こゝには支那の文字行脚を恣にしてゐるといかに文字そのものに浸らるゝか。

又いかに支那現時の風俗に又家庭に優雅な遊びのあるものであるかの大體が判ればよいのである。文字の資料をあさつてあるくにはかう云つた雰圍氣の中に珍書古典をあさり、又その參考資料を入手することである。これら兩輛相待つて始めてそこに本當の支那らしひ氣分に充ちた研究が出来ることになる。

さもないととかく唯醫者が顯微鏡下で黴菌をさがし見てゐるやうな分解ばかりの研究になつてしまふ恐れがある。支那の文字を調べるには何と云つても総合的な大きい氣持で和かに、進まないことには潤澤を覺ゆる研究は出来ない。ひからびて何の潤ひもなく、たと針の尖でつくく解剖をすることはかりが文字研究のすべての任務ではない。その處を示す爲めに傍系の材料ながらこゝに文字游戲の資料にまでも及んで之を紹介して見たわけである。讀者は著者が文字行脚の意義が那邊にあるかを汲みとられるならば望外の幸である。

清朝考證學の學風はいつしか、その弊極まりて、直接間接に文字の穿鑿から異本の比較、古本の考勘記のみを續出せしむるに至つた。しかし一方北碑南帖の研究から、金石瓦當の方面には著しき研究の歩武を進めしめた。そこで鐘鼎彝器の蒐集研究にもなり、又説文以前の狀態にも深入りするやうになり、古文の研究が盛んになり、蔚然として金石文字の大著が次に次々と續刊せらるゝに至つた。自分本書の初版を公にした明治四十二三年の頃は、支那の方でも清朝の末葉で金石の研究の特に勃興

してゐたときであつた。従つてこゝに収録せられた書目にも見らるゝ通り、當時金石文關係の參考資料の刊行せられたものが實に多かつた。ところが清末から民國の初めにかけては例の河南省、彰徳、殷虛の龜甲獸がだんぐゝ出土するやうになり、こゝに文字學界は更に一段の進境を見せて、殷虛書契とか又その系統の研究がこの文字學の分野を賑はすに至つた。こゝに於いてか文字の根本研究に手をつけるには今が絶好のときとなつたわけである。曩に劉鐵雲の藏龜藏陶が公刊された頃は疑ひの目で見られてゐたが、その後續々良書が出て來た。西洋や日本の學界にもその發掘の有様やその出土品の實物についての研究が随分公にされるやうになつて來た。日本では未だ龜甲文字そのものに就いての大きな研究出版こそ出てゐないが、上代文字の考古學的研究の方面はかなり學者の注目を惹くやうになつた。

文字參考資料の集め方は上述各方面から見て、時勢の潮流に棹して進まなくてはならぬのであるが、こゝには自分の文字行脚から獲た最近二十幾年間の土俗學的方面のものは一切割愛することにして、唯本書初版以來獲た書目の主なものを之に追加し、次第に之を列記することゝなした。その資料書目を記すにあたり、便宜その所藏者の名は括弧内に挿記することにしたが、それは略符に據る事にした。

## 二 参考文字資料の書目

参考資料所蔵者の呼びかたについての略符號は次の如く定めておいた。

- (岩) 岩崎靜嘉堂文庫藏
- (帝) 帝室博物館藏
- (圖) 帝國圖書館藏
- (早) 早稻田大學圖書館藏
- (河) 河井仙郎藏
- (高) 高田忠周藏
- (後) 後藤朝太郎藏
- (聽) 聽水閣三井家文庫藏

この目錄稿本の骨子はもと明治四十年に成つたもので自分が學校を出た當時のものが基礎となり、従つて當時存命の林泰輔博士の藏とか又南葵文庫藏とか云つた式のものがかかりあつた。今はそれらは他に轉々し林博士のはたしか日大に大部分移つてしまつたと聞く。又帝大圖書館のものは大正十二年の震災のとき灰燼と化し、今あるものはそれと相違せるものも少なくないわけであるが、これらは

一々こゝにその原本に當り比べて見るの暇を有しない。それであるから、爰にはその書目卷數、選者くらゐの處を目安にして記すことにした。讀書幸に之を諒せられよ。

尙序でに滿洲國にありては畏友水野梅曉師の大車輪的努力により四庫全書刊行と云へる空前の偉業が博物館、圖書館の創設と共に平行して着々進行中の模様である。従つて文字研究資料の方もおのづからそのうちに明かにされることであらうと思ふ。特にこゝに附記してその壯舉完成の曉を期待してゐる次第である。

## 三 文字の参考書目

- 異體字辨二卷 中根璋撰 (圖)
- 韻府古篆彙選五卷 明陳策撰 (大)(圖) 元祿版
- 印文學四卷 前田圓輯 (大)
- 備字例一卷及附錄 關藤政方撰 天保版
- 楷行舊編十五卷 市河三亥輯 (圖)
- 楷法溯源十四卷 清楊守敬輯 (大)
- 楷法辨體二卷 小此木包之撰 (河) 森立之手校本
- 漢篆千字文四卷 曾之唯輯 (大)(圖)
- 漢印分韻二卷續二卷 清袁日省謝景卿同撰 (河)

文字の参考書目

- 漢隸字源六卷 宋棊機撰 (圖)(内) 宋版、明版  
 漢字系譜一卷 高田忠周撰 (大)  
 漢字原理一卷 高田忠周撰 (大)  
 干祿字書一卷 唐顏元孫撰 (大)(圖)(内) 文化版 古經解彙函本 後知不足齋本  
 九經字樣一卷 唐元度撰 (大)(圖) 文政版 古經解彙函本 (早) 後知不足齋本 松崎明俊 刊本  
 行書類纂十二卷 關克明撰男思亮輯 (内) 文政版 天保版  
 (欽定)清文鑑三十二卷補編四卷總綱八卷補總綱二卷 乾隆敕撰 (大)  
 (欽定)滿洲蒙古漢字三合切音清文鑑三十三卷 乾隆敕撰 (大)  
 (欽定)西域同文志二十四卷 乾隆敕撰 (大)  
 金石遺文五卷 明豐道生撰 (大) 清版  
 金石文字辨異十二卷 清邢澍撰 (河) 原刊本  
 廣金石韻府五卷 清林尙英李根同撰 (大)(内) 明版  
 訓蒙字譜四卷 伊藤長胤撰 抄本 (圖)  
 經典文字辨證五卷 清畢沅撰 (河)  
 經典文字辨證書叙文攷證一卷 岡本保孝手稿本  
 藝文備覽百二十卷附補詳字義十四卷 清沙木撰 (圖)  
 五經文字三卷 唐張參撰 (大)(圖)(内) 文化版  
 五經字學攷五卷 清成端人撰 (大)  
 古俗字略七卷 明陳士元撰 (内) 明版  
 草書韻會五卷 金張天錫撰 (圖)

- 草韻彙編二十六卷 清陶南望撰 (圖)  
 草字彙十二集 清石梁撰 (内) 文政版 明治版  
 草彙四卷 三島後輯 文化版  
 從古正文五卷 明黃謙撰  
 字原正譌一卷 元周伯琦撰 (内)  
 字說一卷 清吳大澂撰 (河)  
 字學指南十卷 明朱光家撰 (内) 明版  
 字學訂譌二卷 明李富泰撰  
 字學舉隅一卷 清龍光旬輯 (圖)  
 字形廣狹二卷 狩谷望之撰抄本  
 集古印篆四卷 秦翰輯 (大)  
 四庫全書辨正通俗文字一卷 (河)  
 正字略定本一卷 清王筠撰 (河)  
 重文二卷補一卷 清丁午撰 (河)  
 西域同文表現存八種八卷 不著撰者名氏 (内)  
 說文解字十五卷 漢許慎撰 宋徐鉉等校 (大)(圖) 汲古閣本 官版  
 說文解字繫傳通釋四十卷 南唐徐鉉撰 (大)(圖)  
 說文解字篆韻譜五卷 南唐徐鉉撰 (大)(圖) 函海本 古經解彙函本  
 說文解字錄卅卷 清鈕樹玉撰 (大)  
 說文校定本二卷 清朱士端撰 (大)(圖) 咫進齋叢書本

- 說文字原一卷 元周伯琦撰
- 說文字源集注十六卷附一卷 清蔣和撰
- 說文字原考略六卷 清吳照撰 (圖)(內)
- 說文檢字二卷補遺一卷 清毛讓輯 (大)(圖) 咫進齋叢書本
- 說文通檢十四卷檢疑一卷 清黎水椿撰 (圖)
- 說文繫傳攷異四卷附一卷 清汪憲撰 (圖)
- 說文繫傳校錄十五卷 清王筠撰 (大)
- 說文校議十五卷 清嚴可均姚文田同撰 (大) 小學類編本
- 說文木部箋異一卷 清莫友芝撰 (大)(圖)
- 說文韻詮十四卷 清錢坫撰 (大)
- 說文古本攷十四卷 清沈濬撰 (大)
- 說文管見二卷 清胡秉虔撰 (後)
- 說文外篇十六卷 清雷浚撰 (大)(圖)
- 說文提要一卷 清陳建侯撰 (河)
- 說文揭原二卷 清張行孚撰 (河)
- 說文辨字正俗八卷 清李富孫撰 (大)
- 說文佚字輯說四卷附字義鏡新一卷 清王廷鼎撰 (河)
- 說文逸字辨證二卷 清李植撰 (河)
- 說文逸字二卷附一卷 清鄭珍撰 (河)
- 說文徐氏新補新附攷一卷 清錢大昭撰 (河)

- 說文疑疑二卷 清孔廣居撰 (內)
- 說文拈字七卷補一卷 清王玉樹撰 (大)(圖)
- 說文段注撰要九卷 清馬壽齡撰 (高) 許學叢書本
- 說文諧聲補逸十四卷 清宋保撰 (大) 許學叢刻本
- 說文經韻十三卷附二卷 清楊廷瑞撰
- 說文新附攷六卷 清鄭珍撰 (大)
- 說文新附攷六卷續攷一卷 清鈕樹玉撰 (大)(圖)
- 說文新附考校正一卷 清王筠撰 (大) 許學叢刻本
- 說文蠡箋十四卷 清潘奕衛撰 (大)(圖)
- 說文字母集解六卷 井上章倫輯 (內) 寬保版
- 小篆千文異同攷一卷 釋默隱撰 (河)
- 他山字學二卷 清錢邦彥撰
- (段氏)說文解字註三十二卷 清段玉裁撰 (大)(內)
- 朝陽閣字鑒三十卷 高田忠周撰 (後)
- 篆體異同歌三卷 細井知慎撰 享保版 (大)(圖)
- 篆體異同歌補一卷 釋默隱撰 (圖)
- 篆隸攷異二卷 清周靖撰 (大)
- 篆字彙十二卷 清佟世男輯 (圖)
- 篆林肆攷三卷 明鄭大郁撰 (圖)
- 續說文證疑一卷 清陳詩庭撰 (大) 許學叢刻本

- 入矢注字圖說一卷 清顧陳瑛撰(圖)
- 文集官府文字考一卷 (內) 寫本
- 辨似錄一卷 岡本保孝撰抄本 (岩)
- 別體字類二卷 萩原榮撰 (河)
- 偏類六書通七卷 古森厚孝輯 (圖)
- 文字集略一卷 梁阮孝緒撰 (大)(圖)
- 文字蒙求四卷 清王筠撰 (大)
- 文選古字通疏證六卷 清薛傳均撰 (河)
- 問寄集一卷 明張位撰
- 問寄典註六卷 清唐英撰 (內)
- 六書正譌五卷 元周伯琦撰 (大)(圖) 清版 (內) 明版
- 六書溯源十二卷 元楊桓撰
- 六書統二十卷 元楊桓撰 (內) 明版
- 六書精蘊六卷音釋一卷 明魏校撰 (內) 明版
- 六書總要五卷 明吳元滿撰 (高)
- 六書指南二卷 明李登撰
- 六書分類十二卷 清傅世廷輯 清版
- 六書準四卷 清馮調鼎撰
- 六書通十卷 清閔齊俊撰畢弘述訂 (內)(圖)
- 六書假借經微四卷 清朱駿聲撰 (河)

- 六書類纂八卷 清吳錦章撰 (河)
- 六書辨通五卷 清楊錫觀撰 (內)
- 六書辨譌輯要三卷 清王玉撰 (大)(內)
- 六書分毫三卷 清李調元撰 (大)(圖) 函海本
- 六書故三十三卷 元戴侗撰 (大)(內) 明版、清版
- 六書索隱五卷 明楊慎撰 (河) 明版
- 六書正義十二卷 明吳元滿撰 (內) 明版
- 六書長箋七卷 明趙宦光撰 (圖)
- 六書本義十二卷 明趙鶴謙撰 (內) 明版
- 龍龜手鑑四卷 遼釋行均撰 (大)(內) 清版、朝鮮版、日本版
- 類纂古文字考五卷 明都俞撰 (大)
- 隸釋二十七卷 宋洪适撰 (內)
- 隸續二十七卷 宋洪适撰 (內)
- 隸法彙纂十卷 清項懋德撰 (內) 明治版
- 隸辨八卷 清顧藹吉撰 (大)(內) 清版、寬政版、明治版
- 隸篇十五卷續一卷再續一卷 清翟云升撰 (大)
- 倭字考一卷 岡本保孝撰抄 (岩)
- 和楷正訛一卷 大宰純撰 (圖) 明和版
- 王氏讀說文記一卷 清王念孫撰 (大) 許學蓋刻本
- 筠清館金文五卷 清吳榮光撰 (大)



- 汗簡三卷 宋郭忠恕撰 (大)
- 汗簡箋正七卷 清鄭珍撰 (大)
- 號季子白盤銘考一卷 清吳雲撰 (河)
- 奇觚室吉金文述廿卷 清劉心源撰 (後)
- 求古精舍金石圖四卷 清陳經撰 (河)
- 金石索十二卷 清馮雲鵬撰 (大)
- 敬吾心室識篆圖不分卷 清朱善旂撰 (河)
- 荆南萃古編一卷 清周懋琦撰
- 古籀篇附學古發凡(卅五冊) 高田忠周撰
- 古籀拾遺三卷附一卷 清孫詒讓撰 (河)
- 古文原始一卷 清曹金鑑撰 (河)
- 古文四聲韻五卷 宋夏竦撰 (大)
- 古文審八卷 清劉心源撰
- 從古堂款識學十六卷 清徐同柏撰 (後)
- 鐘鼎字源五卷 清汪立名撰 (大)(圖)(內)
- 鐘鼎款識一卷 宋王厚之撰 (大)
- 集鐘鼎古文韻選五卷 明釋道泰撰
- 秦漢瓦當文字三卷 清程敦撰 (大)
- 秦漢瓦當圖一卷 清畢沅撰 (大)
- 秦漢瓦圖記四卷 清朱鳳樓抄本

- 石鼓文纂釋一卷 清趙烈文撰 (河)
- 石鼓文釋存一卷 清張燕昌撰
- 石鼓文定本二卷 清劉澆撰 (河)
- 石鼓文定本不分卷 清古鼎山農撰 (河)
- 石鼓文匯不分卷 清尹彭壽撰 (河)
- 說文古籀疏證六卷 清莊述祖撰 (大)(圖)
- 說文古籀補十四卷附一卷 清吳大澂撰 乙未年增輯本 (河)
- 撫古遺文二卷補遺一卷 明李登撰 (大)
- 積古齋鐘鼎彝器款識十卷 清阮元撰 (後) 文選樓叢書本
- 積古齋鐘鼎款識稿本不分卷 清朱爲弼撰 (河)
- 千甍亭古甌圖釋二十卷 清陸心源撰 (河)
- 籀史十卷 宋程若年撰 (圖)
- 鐵雲藏龜鐵雲藏陶不分卷 清劉鐵雲輯 (後)
- 陶齋吉金錄八卷 清端方輯 (大)
- 攀古樓彝器款識二卷 清潘祖蔭撰 (後)
- 繆篆分韻五卷補一卷 清桂馥撰 (河)
- 碑別字五卷 清羅振玉撰 (河)
- 碑別字補五卷 清羅振玉撰 (河)
- 兩漢金石記廿二卷 清翁方綱撰 (後)
- 兩壘軒彝器圖釋十二卷 清吳雲撰 (河)

- 歷代鐘鼎彝器款識法帖二十卷 宋薛尚功撰 (河) 明版
- 擬古錄金文三卷 清吳式芬撰 (後)
- 西域考古圖譜二卷 國華社編 (後)
- 寰宇貞石圖六卷 (拓本縮寫) (後)
- 石鼓文集釋一卷 清任兆麟撰 (圖)
- 恒軒吉金文錄不分卷 清吳大澂撰 (後)
- 古泉匯六十四卷 清李佐賢撰 (大)
- 曹氏吉金圖二卷 清曹奎撰 (圖)
- 商周彝器釋銘四卷 清呂調陽撰 (河)
- 西清古鑑四十卷 清乾隆勅撰 (後)
- 嘯堂集古錄二卷 宋王懷撰 (大)
- 嘯堂集古錄考異二卷 清張翥撰 (大)
- 長安獲古編不分卷 清劉喜海輯 (大)
- 二百蘭亭齋金石記四卷 清吳雲撰 (大)
- 二銘草堂金石聚十六卷 清張德容撰 (圖)
- 三代吉金文字一卷 清羅振玉輯 (後)
- 篆文孝經一卷 吳大澂撰 (後)
- 篆文論語一卷 吳大澂撰 (後)
- 古籀虎字手拓 吳大澂撰 (後)
- 三千字解譯國語(安南本)一卷 發軔總堂版 (後)

- 泉屋清賞四卷(舊版) 住友吉左衛門刊 (後)
- 泉屋清賞五卷(新版) 住友吉左衛門刊 (後)
- 泉屋清賞續編(新版)二卷 住友吉左衛門刊 (後)
- 陳氏舊藏十鐘一卷 濱田青陵撰 (後)
- 刪訂泉屋清賞一卷 清程樹德撰 (後)
- 說文稽古篇一卷 岡井慎吾撰 (後)
- 日本漢字學史一卷 高田忠周撰 (後)
- 漢字詳解六卷 高田忠周撰 (後)
- 國定漢字諺解一卷 高田忠周撰 (後)
- 日用漢字正解一卷 高田忠周撰 (後)
- 泰金石刻辭二卷 清羅振玉撰 (後)
- 古明器圖錄四卷 清羅振玉撰 (後)
- 古鏡圖錄三卷 清羅振玉撰 (後)
- 印文存二卷 清羅振玉撰 (後)
- 金存二卷 清羅振玉撰 (後)
- 石鼓文考釋一卷 清羅振玉撰 (後)
- 殷虛書契考釋一卷 清羅振玉撰 (後)
- 流沙墜簡二卷 清羅振玉王國維同編 (後)
- 四朝鈔幣圖錄一卷 清羅振玉撰 (後)
- 缶廬臨石鼓全文一卷 林少東撰 (後)

- 金泥石屑 清羅振玉撰 (後)
- 秦漢瓦當文字卷五 清羅振玉撰 (後)
- 殷虛古器物圖錄一卷 清羅振玉撰 (後)
- 悲庵臚墨二卷 清丁仁吳隱共編 (後)
- 廣倉研錄二卷 清鄒安撰 (後)
- 古器物範圍錄 清羅振玉撰 (後)
- 殷虛書契前編八卷 清羅振玉撰 (後)
- 殷虛書契後編二卷 清羅振玉撰 (後)
- 殷虛書契菁華一卷 清羅振玉撰 (後)
- 秦泰山殘字明拓本 清羅振玉撰 (後)
- 奇觚室樂石文述 清劉心源撰 (後)
- 室齋集古錄二十八卷 清吳大澂撰 (後)
- 永壽靈壺齋吉金文字二卷 竹山署 (後)
- 草法指南二卷 清羅一麟編 (後)
- 殷商貞卜文字攷一卷 清羅振玉撰 (後)
- 藍齋吉金錄八卷 清陳介祺撰 (後)
- 方若舊藏陶瓦不分卷 清方若撰 (後)
- 古文字考五卷 清鄒俞撰 (後)
- 金石文字辨異十二卷 清劉世衍撰 (後)
- 金石圖說四卷 清牛運震撰 (後)

- 說文校議十五卷 清姚文田嚴可均同撰 (後)
- 琴歸室瓦當文鈔一卷 清黃中憲撰 (後)
- 說文解字翼徵十四卷 (朝) 金晚植撰 (後)
- 說文段注補訂四十四卷 清胡燏芬撰 (後)
- 七十二侯印譜二卷 明何燾撰 (後)
- 字辨證篆十七卷 清易本煥撰 (後)
- 正俗備用字解四卷補 清王兆琛撰 (後)
- 續考古圖卷五卷 清陸心源撰 (後)
- 字考一卷 明黃元主撰 (後)
- 吉金所見錄十二卷 清渭園撰 (後)
- 漢晉石刻墨影一卷 清羅振玉撰 (後)
- 歷代符牌圖錄一卷 清羅振玉撰 (後)
- 歷代符牌後錄一卷 清羅振玉撰 (後)
- 玉篇卷第十八後分(零本) (後)
- 殷虛文字類編十四卷 清羅振玉、商承祚同撰 (後)
- 待問編十三卷 清羅振玉撰 (後)

### 四 音韻の参考書目

- 押韻釋疑五卷 宋歐陽德隆等撰 (内) 元版
- 韻集一卷 晋呂靜撰 (大)
- 韻略一卷 北齊楊休之撰 (大)
- 韻經五卷 梁沈約撰 (大)
- 韻略五卷 宋丁度撰 (内) 倭版
- 韻鏡一卷 宋張麟之校 (内) 寛永版 清原宣賢校 (内) 慶安版、天和版 (大) 覆水録本 (古逸叢書本) 藍頭韻鏡四卷
- 韻補五卷 真享版 (内) 寛永版、寛文版
- 韻詰五卷補一卷 宋吳棫撰 (内) 明版
- 韻府鈎沈五卷 清方濬師撰 (大)
- 韻會小補三十卷 清曹凌撰 (大) (内)
- 韻總持三卷 明朱簡撰 (大)
- 韻譜本義十卷 明茅濬撰 (内) (内) 明版
- 韻釋便覽五卷 明孫維城撰 (内) 明版
- 韻海全書十六卷 明李廷機撰 (内) 明版
- 韻考集成三十卷 明林淳撰 (内) 明版
- 韻略易通二卷 明蘭廷秀撰 (大)

- 韻表三十卷 明葉秉敬撰 (内) 明版
- 韻輯四卷 明蘇茂相撰 (内) 明版
- 韻岐五卷 清江昱撰 (後)
- 韻補正一卷 清顧炎武撰 (大) (内)
- 韻鑑白雲軸五卷 清葛寬中等撰 (内)
- 韻辨五卷 清劉贊撰 (内)
- 韻問一卷 清毛先舒撰 (大) (内) 昭代叢書本
- 韻綜十二卷 清陳詒厚撰 (内)
- 韻切指歸二卷附初學讀會法 清吳恩齡撰 (内)
- 韻府萃音十二卷 清龍栢撰 (内)
- 韻雅五卷 清施何牧撰 (内)
- 韻雅一卷 清俞樾撰 (内)
- 韻統圖說不分卷 清耿人龍撰
- 韻叢一卷 清徐世溥撰 (大)
- 韻白一卷 清毛先舒撰 (大)
- 韻辨付文五卷 清沈兆霖撰 (大)
- 韻史一卷 明陳梁撰 (内) 讀說郭本
- 韻學大成二卷 明李于鱗撰 (内)
- 韻學楷梯二卷 近藤子業撰 天保版
- 韻學筌蹄一卷 近藤篤撰 (大) (内) 寛政版

- 韻學卮言一卷 清黃本驥撰 (圖) 三長物齋叢書本
- 韻學要指十一卷 清毛奇齡撰 (大)
- 韻學指要一卷 清毛奇齡撰 (圖) 龍威秘書本
- 韻學通指一卷 清毛先舒撰 (大)
- 韻學大成四卷 明濮陽涑撰 (內) 明版
- 韻學集成十三卷 明章黼撰 (圖) (內) 明版
- 韻學秘典四卷 藤原肅撰 土師子德補寫本
- 韻學口訣一卷 田川周芳撰 (河)
- 韻鏡頓悟集一卷 牧野重長撰 (大) 寛文版
- 韻鏡古義標注二卷 釋寂龍撰 (圖) 元文版
- 韻鏡諸鈔大成七卷 馬揚信武撰 寛永版
- 韻鏡翼三卷 釋乘運撰 (大)
- 韻鏡看拔抄二卷 釋惠善撰 (大) 寫本
- 韻鏡攷一卷 岡本保孝撰 (大) (圖) 寫本
- 韻鏡秘事抄一卷 小龜益英撰 寛文版
- 韻鏡圖解綱目四卷 釋尊慈撰 (圖) 寛保版
- 韻鏡發揮一卷 大澤贊政定 (圖) 天保版
- 韻鏡發揮同音考七卷 大澤贊撰 (早) 寫本
- 韻鏡問答抄一卷 雲鏡十重慶撰 (圖)
- 韻鏡口受一卷 鶴峰戊申撰 (南) 寫本

- 韻鏡經緯一卷 釋龍音撰 天明版
- 韻鏡詳說大全一卷 (圖) 元祿版
- 韻鏡袖中秘傳抄三卷 毛利瑚珀撰 (大) (圖) 正徳版 元祿版
- 韻鏡古音正圖辯二卷 寺尾正長撰 (圖) 安永版
- 韻槩二卷 萩生茂綱撰 (圖) 寫本
- 韻書音義考五卷 清李光瓊撰 (內)
- 易音三卷 清顧炎武撰 (大) 音學五書本
- 易韻四卷 清毛奇齡撰 (大)
- 音韻字海二十卷 明張溥等輯 蕭鳴盛校 (圖) (內) 明版
- 音韻日月燈七十卷 明呂維祺撰 (大) (圖) 明版
- 音聲紀元六卷 明吳繼仕撰 (大)
- 音韻正訛四卷 明孫燧撰 (內) 明版
- 音韻啓鑰十卷 明徐守綱撰 (內) 明版
- 音韻問答一卷 清錢大昕撰 (圖) 昭代叢書本
- 音韻問答錄二卷 岡本保孝撰鈔本 (岩)
- 音韻源流五十卷 清潘成撰 (大)
- 音韻清濁鑑三卷 清王祚禎撰 (內)
- 音韻啓蒙二卷 數田年治輯 (大)
- 音韻假字用例附圖三卷 白井寬隆輯 (大)
- 音學辨微一卷 清江水撰 (高)

- 音學五書三十八卷 清顧炎武撰 音論 詩本音 易音 唐韻正 古音表 (後)
- 音學十書不分卷 清江有誥撰
- 音例三卷 齊宮必簡撰 (圖) 寶曆版
- 音論三卷 清顧炎武撰 (大) 音學五書本
- 歌麻古韻考四卷 清吳樹聲撰 (大)
- 改併五音類聚四聲篇海十五卷 金韓孝彥撰 韓道昭輯 (內) 明版
- 改併五音集韻十五卷 金韓道昭撰 (大) 明版
- 海藏韻略二卷 (圖) (南) 長享明應寫本
- 海藏略韻二卷 不著撰人名氏 (早) 五山版
- 解經秘藏要略一卷 寺尾正長撰 (圖) 天明版
- 解經秘藏三卷 寺尾正長撰 (圖) 天明版
- 康熙字典等韻指示一卷 飯島道寶撰 (圖)
- 江氏音學十書不分卷 音學十書を見よ
- 合類音鏡一卷 湯淺慶重輯 (圖) 貞享版
- 合并字學集篇集韻二十三卷 明徐孝輯 張元善校
- 漢魏音四卷 清洪亮吉撰 (大) 洪北全集本 (河) (後) 單行本
- 漢音考一卷 屋代弘賢撰 寫本 (大)
- 漢音正辨二卷 釋素眞撰 (後)
- 漢吳音圖三卷 太田方撰 (大) 文化版
- 漢吳音圖補正一卷 岡本保孝撰 (圖)

- 漢字三音考一卷 本居宣長撰 (大) (圖)
- 漢學諧聲二十四卷 清戚學標撰 (大)
- 玉篇直音四卷 明孫一宏撰 (內) 明版
- 奇字韻五卷 明楊慎撰 (大) (圖) 函海本
- 九經直音二卷 唐陸德明撰 (內) 元版
- 九經補韻一卷 宋楊伯嶠撰 清錢何考證 (大)
- 九經補韻考證一卷 清秦壽齊撰 (大) 後知不足齋叢書本
- 九弄反紐相傳和解二卷 釋盛典撰 (圖) 享保版
- 九弄辨一卷 釋文雄撰 (大) 寬延版
- 岐疑韻記十八卷 清杜樹詠輯 (早)
- 今韻古分十七部表 清段玉裁撰 (大) (圖) 昭代叢書本
- 今韻箋略五卷 清王立名撰 (內)
- (欽定)音韻闡微十八卷 康熙勅撰 (大)
- (欽定)同文韻統六卷 乾隆勅撰 (大)
- (欽定)叶韻彙輯五十八卷 乾隆勅撰 (大)
- (欽定)音韻述微三十卷 乾隆勅撰 (大)
- 屈宋古音義三卷 明陳第撰 (內)
- 屈子正音三卷 清方濟撰 (河)
- 廣韻雋五卷 明袁鳴泰撰 (圖) 明版
- 廣韻五卷 隋陸法言撰 (大) 元版

音韻の参考書目

- 廣韻(重修)五卷 宋陳彭年等奉敕撰 (内) 元版、明版、張士俊校刊本 (大)(古逸叢書覆宋本)(古逸叢書覆元本)(古經解叢書本)(圖)
- 廣益略韻三十一卷 (圖)
- 群經音辨七卷 宋賈昌朝撰 (大)(内) 明版 字學三書本
- 官韻考異一卷 清吳省欽撰 (圖) 藝海珠塵本
- 經史正音切韻指南一卷 元劉鑑撰 (内) 明版
- 經史莊岳音一卷 釋文雄撰 (内) 寶曆版
- 叶韻攷正十六卷 清朱履仲撰 (河)
- 元音統韻二十八卷 明陳盡謨撰
- 元韻譜五十四卷 明喬中和撰
- 現代支那語學一卷 後藤朝太郎撰 (大)
- 古今韻會舉要三十卷 元熊忠撰 (内) 元版
- 古今字韻全書集韻十五卷 不著撰人名氏 (内) 明版
- 古叶讀五卷 明雙黃撰 (大)
- 古音複字五卷 明楊慎撰 (大) 函海本
- 古音駢字一卷續編五卷 明楊慎撰 (續編五卷清莊履豐莊州鉉全撰) (大)(内) 明版 函海本
- 古音叢目五卷古音彙要五卷古音餘五卷古音附錄一卷 明楊慎撰 (大) 函海本
- 古音略例一卷 明楊慎撰 (大)(圖) 函海本
- 古音正義一卷 清熊士伯撰 (大)
- 古音譜八卷 清姚文田撰
- 古音類表九卷 清傅壽彤撰

- 古音表二卷 清顧炎武撰 (大) 音學五書本
- 古音合二卷 清李調元撰 (大) 函海本
- 古音表一卷 岡本保孝撰 (大)(木) 手稿本
- 古音通八卷 茅原定撰 寫本
- 古今韻分註撮要五卷 明甘雨撰
- 古今韻攷四卷 清李因篤撰 (大) 咫進齋叢書本
- 古今韻準一卷 清朱駿聲撰 (大)
- 古今中外音韻通例不分卷 清胡垣撰 (後)
- 古今韻略五卷 清邵長衡撰 (圖)(内)
- 古今韻表新編五卷 清仇廷樞撰
- 古今通韻十二卷 清毛奇齡撰 (大)
- 古今韻略補不分卷 (内) 寫本 (圖) 寫本
- 古韻湖原八卷 清安念祖等撰 (後)
- 古韻論三卷 清胡秉虔撰 (河)
- 古韻發明不分卷 清張畊撰 (大)
- 古韻通說廿卷 清龍啓瑞撰 (大)
- 古韻叶音六卷 清楊慶撰 (後)
- 古韻通八卷 清柴紹炳撰 (後)
- 古韻標準四卷 清江水撰 (大)(圖)
- 古唐韻疏四卷 清陳盡謨撰 (内)

音韻の参考書目

- 古澗韻略三十卷 圖 (寫本)
- 五韻論二卷 清鄭漢勳撰 (河)
- 五音集韻十五卷 金韓道昭撰 (圖)
- 五方元音二卷 清樊騰鳳撰 (大)(圖)
- 洪武正韻十六卷 明樂韶鳳等奉敕撰 (內)(圖) 明版
- 洪武聚分韻九卷 彰考館輯 (圖) 寬永版
- (增修古註)禮部韻略五卷 宋毛晃培註其子居正校勘重增 (內) 元版
- 洪韻解鑰五卷 圖明院阿闍梨撰 (圖) 寫本
- 三音通考二卷 清謝有輝撰 刊本
- 三韻通考一卷 (圖) 韓版
- 三音正譌一卷 釋文雄撰 (大)(圖) 寶曆版
- 三重韻一卷 釋師錄輯
- 詩韻辨略二卷 明楊貞一撰
- 詩韻更定五卷 清吳國縉輯
- 詩聲分例一卷 清孔廣森撰 (大) 續皇清經解本
- 詩聲類十二卷 清孔廣森撰 (大)(圖) 續皇清經解本
- 詩經叶音辨譌八卷 清劉維謙撰 (後)
- 詩傳叶音考三卷 清吳起元撰
- 詩本音十卷 清顧炎武撰 (大) 音學五書本
- 詩經五聲音釋證一卷 高正綱撰

- 四聲五音九弄反紐圖一卷 唐釋神珙撰 (大)
- 四聲篇海十五卷 金韓孝彥撰 (內)
- 四聲切韻表一卷 清江水撰 (大) 粵雅堂叢書本
- 四聲等子一卷 不著撰人名氏 (大) 咫進齋叢書本
- 四音定切四卷 清劉熙載撰 (河)
- 四聲國字通五卷 牧田方毅輯 (圖) 寫本
- 四聲彙辨三卷 伊藤善詔撰 (圖) 寫本
- 四書反切一覽一卷 寶田敬撰 (大)
- 四聲通解二卷 朝鮮崔世珍奉敕撰 (內) 日本寫本
- 四十四音論辨誤一卷 岡本保孝撰抄本 (岩)
- 支那古韻考一卷 大島正健撰 (後)
- 字韻合璧二十卷 不著撰人名氏明朱孔陽訂正刊行
- 字韻早鑑大成十二卷 毛利香之丞撰 (圖) 元祿版
- 字音假字用格一卷 本居宣長撰 (大)(圖)
- 字音假字用格辨誤四卷 大澤實撰 (圖)
- 字彙莊嶽音一卷 釋文雄撰 (圖) 寶曆版
- 字類標韻二卷 清維寧華輯 (大)
- 初學檢韻一卷 清姚文登輯 (圖)
- (重修)廣韻五卷 宋陳彭年奉敕撰 (廣韻を見よ) (大)(圖) 古逸叢書本
- 升庵韻書二十七卷 明楊慎撰 (內) 明版



文字の研究 (附錄)

- 聚分韻略五卷 釋師鍊撰 (內) 明應版、永正版
- 十二字頭滿漢對譯一卷 清廖綸撰 (內) 日本寫本
- 十三經音略十三卷 清周春撰 (河)(大) 粵雅堂叢書本
- 集韻十卷 宋丁度等奉敕撰 (內) 宋版
- 集韻攷正十卷 清方成珪撰 (高)
- 述均十卷 清夏燮撰 (後)
- 戚林八音合訂一卷 清陳他輯 (圖)
- 新刻啓蒙捷見便明一卷 明族十洲輯 (圖) 寬政版
- 正韻腋編四卷 明楊時儉撰
- 正韻彙編四卷 明周嘉棟撰
- 西儒耳目資不分卷 明金尼閣撰
- 聲韻叢說一卷韻問一卷 清毛先舒撰 (大) 昭代叢書本
- 聲韻圖譜不分卷 清錢人麟撰
- 聲韻會通韻要粗釋二卷 明王應電撰 (內) 明版
- 聲韻考四卷 清戴震撰 (大)
- 聲音表一卷 清任兆麟撰 (大)(後)
- 聲音文字通三十三卷 明趙撝謙撰
- 聲音發源圖解一卷 清潘遂先撰
- 聲類一卷 魏李登撰 (大)
- 聲類四卷 清錢大昕撰 (大) 粵雅堂叢書本

- 聲類表一卷 清戴震撰 (河)
- 聲類表一卷 岡本保孝撰抄本
- 說文聲訂二卷 清苗夔撰 (大)(圖)
- 說文韻譜攷五卷 清王筠撰 (高)
- 說文分韻易知錄十卷 清許翼行撰 (岩)
- 說文解字五音韻譜十二卷 宋李燾撰 (大)(內) 明版、朝鮮版
- 說文通訓定聲十八卷東韻一卷 清朱駿聲撰 (大)
- 說文聲系十四卷 清姚文田撰 (大) 續皇清經解本
- 說文聲讀表二卷 清苗夔撰 (大) 續皇清經解本
- 說文聲類二卷 清嚴可均撰 (大) 續皇清經解本
- 說文雙聲疊韻譜一卷 清郭廷植撰 (大) 後知不足齋叢書本
- 說文雙聲二卷疊韻三卷 清劉熙載撰 (河)
- 說文諧聲譜九卷 清張成孫撰 (大) 續皇清經解本
- 說文諧聲孳生述二卷 清陳立撰 (大) 郵齋叢書本
- 說文解字舊音一卷 清畢沅撰 (圖)
- 說文審音十六卷 清張行孚撰 (河)
- 說文字源韻表二卷 清胡重撰 (河)
- 說文音均表十七卷 清江沅撰 (大) 續皇清經解本
- 切韻指掌圖二卷附檢例一卷 宋司馬光撰
- 切韻射標一卷 明李世澤撰 (大) 居家必備本 說郭本

音韻の参考書目

- 切韻考四卷外篇三卷 清陳澧撰 (圖) 東塾叢書本
- 唐韻正二十卷 清顧炎武撰 (大) 音學五書本
- 唐韻考五卷 清紀容舒撰 (圖)
- 中州音韻一卷 元周德清撰 (內) 明版
- 直音篇七卷 明章黼撰 (內) 明版 (圖)
- 沉氏四聲考一卷 清紀昀輯 (大) 鏡烟堂本
- 剔弊五方元音二卷 清趙培梓撰 (大)
- 訂正臺灣十五音字母詳解一卷 臺灣總督府民政部學務課輯 (大)
- 轉注古音略五卷 明楊慎撰 (大) 函海本 (附古音後語)
- 天然窮源字韻九卷 清姜日章撰
- 童蒙頌韻略一卷 三善富庸撰 (圖) 寫本
- 讀易韻考七卷 明張獻翼撰
- 讀書正音四卷 清吳震方撰
- 等切元聲十卷 清熊士伯撰
- (杜詩)雙聲疊韻括略八卷 清周春撰 (河)
- 發音錄一卷 明張位撰 (圖) 青昭堂叢書本 (內) 天文版
- 發字四聲辨蒙解一卷 平野幹撰 (早) 嘉永版
- 發音辨義二卷 星野多仲撰 (圖)
- 北京正音支那新字典一卷 岩部成九輯 (後)
- 本韻一得二十卷 清龍爲霖撰

- 翻切伐柯篇一卷 釋文雄撰 (大)
- 男信三卷 釋義門撰 (大) (圖)
- 南曲人聲客問一卷 清毛先舒撰 (大) (圖) 昭代叢書本
- 日清字音鑑不分卷 伊澤修二、大矢透同撰 (後)
- 磨光韻鏡二卷 釋文雄撰 (大) (圖) 天明版
- 磨光韻鏡後篇二卷 釋文雄撰 (圖) 天明版
- 磨光韻鏡考一卷 岡本保孝手稿本 (圖) (岩)
- 磨光韻鏡索隱集解一卷 神野志寧輯 (圖) 寫本
- 萬葉字音辨證二卷 木村正辭撰 (大) (圖)
- 蒙古字韻二卷 元朱宗文撰
- 毛詩雙聲疊韻說一卷 清王筠撰 (河)
- 毛詩韻訂十卷 清苗夔撰 (圖)
- 毛詩古音考四卷 明陳第撰 (大)
- 越語冝繁錄一卷 清毛奇齡撰
- 六書賦音義三卷 明張士佩撰 (內) 明版
- 六書派原直音二卷 明吳元滿撰
- 六書音均表五卷 清段玉裁撰 (圖) (內)
- 六書韻微十六卷 清安吉撰 (大)
- 六書系韻廿四卷 清李貞撰 (大)
- 律古詞曲賦叶韻統十二卷 明程元初撰 (內) 明版

文字の研究 (附録)

- 笠翁詩韻五卷 清李漁撰 (内)
- 類音八卷 清潘耒撰 (内)
- 禮部韻略五卷 宋丁度撰 宋毛晃增注本 (内) 元版 (圖) 清版
- 漢字の音變化一卷及び漢字音韻考一卷 大島正健撰 (後)
- 唐寫本唐韻一卷 清羅振玉題 (後)
- 毛詩正韻四卷 清丁以此撰 (後)
- 切字肆考一卷 清張畊撰 (後)
- 古韻發明三卷 清張畊撰 (後)
- 經韻集字析解二卷 清彭良敏撰 (後)
- 五分元音二卷 清年希堯撰 (後)
- 小學紺珠十卷 宋王應麟撰 (後)
- 楚辭旁注直音二卷 清吳繼武撰 (後)
- 日臺大辭典不分卷 臺灣總督府編 (後)
- 三千字解釋附序 (安南本) (三千字解釋國語中參照) (後)

五 言語の参考書目

此の部には文字の部に入れまほしきものなも少からず含む、但し・印を附す。讀者その心して觀られたし。

- 韻府群玉二十卷 元陰時夫撰 (圖) 元版
- 彙雅二十卷續編二十八卷 明張萱撰 (内) 寫本
- (鼈頭)韻府一剛三卷 清顧懋功輯 (圖)

韻府一剛 中井幹齋撰 早

- 逸雅八卷 (釋名に同じ) 漢劉熙撰 (大) (内) 寛政版
- 一切經音義二十五卷 唐釋玄奘撰 (大)
- 一切經音義一百卷 唐釋慧琳撰 (大)
- 影宋本爾雅三卷校語一卷 松崎復校 (大)
- 演說文一卷 梁庾徵默撰 (大)
- 音漢清文鑑二十卷 清董任明鐸撰 (内)
- \*解字小記一卷 清程瑤田撰 (大) (河)
- 諧聲指南一卷 明吳元滿撰
- 諧聲品字箋不分卷 清庾德升撰 (大)
- \*海篇玉鑑二十卷 明武緯子補王衡校 (内) 明版
- \*海篇心鏡二十卷 不著撰人名氏 (圖) (内) 明版劉孔當校
- \*海篇棲鶴十五卷 明凌香鳳撰 (内) 明版
- \*海篇直音五卷 不著撰人名氏 (圖) (内) 明版
- \*海篇星鏡十九卷 明葉向高撰 (内) 明版
- \*海篇朝宗十二卷 明陳仁錫輯 (内) 明版
- \*海篇明鏡十七卷 明陳五昌撰 (内) 明版
- \*海篇彙編全書十九卷 明陳仁錫輯 (内) 明版
- \*康熙字典四十二卷 康熙勅撰 (大) (圖) (内)
- \*康熙字典考異正誤二卷 渡部溫撰 (圖) (大)

言語の参考書目

- 康熙字典撮要三卷 英國洪約翰撰、清王楊安釋 (大)
- 交泰韻一卷 明版 (早) 呂新吾全書本
- 龜頭雜字五卷 不著撰人名氏 (內) 明版
- 漢和字典不分卷 三省堂撰 (大) (圖)
- 漢文典一卷 猪狩幸之助撰 (大)
- 漢文典一卷續一卷 兒島獻吉郎撰 (圖)
- 漢字和訓五卷 井澤長秀撰
- 汲古閣說文訂一卷 清段玉裁撰 (圖) 咫進齋叢書本
- 急就篇四卷 漢史游撰 (大) (內) 明版、寬政版 古逸叢書本 學津討原本 古經解彙函本 津逮秘書本 格致叢書本
- 急就篇補注四卷 明王應麟撰 (河)
- 急就篇攷證一卷 清鈕樹玉撰 (圖) 嶽鶴閣叢書本
- 奇字名十二卷 清李調元撰 (大) 函海本
- 鄉談雜字一卷下卷缺 (圖) 寫本 (大) 寫本
- 匡謬正俗八卷 唐顏師古撰 (大) (內) 明和版 鶴海珠塵本
- 許學叢書 清張炳翔輯 (高) 許氏年表 說文答問疏證 壽傳均撰、說文辨疑 顧廣圻撰、說文字原均表 胡重撰、轉注古義考 曹仁虎撰、說文段注撰要 馬壽齡撰、說文諧聲補逸 宋保撰、讀說文雜識 許毓撰、說文部首歌 馮桂芬撰、說文疑 孔廣居撰、說文聲訂 苗慶撰、說文段注訂 鈕樹玉撰、說文新附考 鈕樹玉撰
- 許學叢刻 清許繩輯 (大) 說文說 孫濟曾撰、轉注古義考 會仁虎撰、說文訂 嚴可均撰、說文辨疑 顧廣圻撰、說文學例 陳豫撰、說文彙纂 潘奕雋撰、王氏讀說文記 王念孫撰、新附考校正 王筠撰、讀說文證疑 陳詩庭撰、王筠撰
- 玉篇 梁顧野王撰 古本玉篇 三十卷唐孫強增訂 (內) 天保版 (大) 殘簡、石山本、高山寺本、東大寺本、兼七堂本、零本

三卷古逸叢書本明治版 (吉川牛吉模寫神宮廳庫本) 柏木探古覆刻 (圖)

- 玉篇校刊記一卷 清鄧顯鶴撰 (高) 張刻玉篇附卷
- 虛字解正續二卷 皆川恩撰 明治版 (圖)
- 虛字解續 皆川恩撰 寬政版 (圖)
- 虛字詳解十五卷 皆川恩撰 (圖) 寫本
- 虛字註釋備考一卷 清張文炳撰日本萩原裕校點
- 金壺精萃不分卷 原刊本 (後)
- 金壺字考十九卷續二十卷補一卷 清田朝恒撰 (大) (圖) (內)
- 會玉篇活法三卷 毛利貞齋撰 (圖)
- 華夷譯語一卷 明火源潔奉勅撰
- 廣雅十卷 魏張揖撰 (大) (內) 明版、寶歷版 古經解彙函本
- 廣雅疏證十卷 清王念孫撰 (後) 臯清經解本
- 廣雅釋詁疏證拾遺一卷 清俞樾撰 (大) (圖) 春在堂全書本
- 廣雅外傳一卷 (楓蔭) 狩谷望之手稿本
- 廣說文答問八卷 清承培元撰 (高)
- 廣志一卷 晉郭義恭撰 (早)
- 校正方言十三卷 清盧文弨撰 (高)
- 廣釋名二卷 清張金吾撰 (大) (圖) 續粵雅堂叢書本
- 冠解助語辭一卷 毛利貞齋重訂 (早) 享保版
- 訓纂篇一卷 漢揚雄撰 (大)

言語の参考書目

- 桂苑珠叢一卷 隋諸葛顛撰 (大)
- 檢字篇二卷 狩谷望之撰 (山石)
- ・惠氏讀說文記十四卷 清・棟撰 (大) 小學類編本
- 形狀字林五卷 日尾約撰 (大) 寫本
- 經子難字二卷 明楊慎撰
- 經籍纂詁二百十六卷 清阮元撰 (大)(圖)(南)(岩)
- 經傳釋詞十卷 清王引之撰 (大) 王氏五種本
- 經典釋文卅卷考證卅卷 唐陸德明撰清盧文弼考證 (大)
- 經詞衍釋十卷補一卷 清吳昌瑩撰 (河)
- 華嚴經音義四卷 唐釋慧苑撰 (大)(圖)
- 兼韻音義八卷 清殷秉鐸撰 (後)
- 群經四書字詁百五十卷 清段誘廷撰 (河)
- 詁幼一卷 宋顏延之撰 (大)
- 五雅全書三十七卷 明葉日本輯 (圖)(內) 清版
- 古今字詁一卷 魏張揖撰 (大)
- 古今文字表一卷 後魏江式撰 (大)
- 五條鯖字海二十卷 不著撰人名氏 (內) 明版
- 五車韻瑞百六十卷 明凌雅撰 (大)
- ・五體字書四卷 前田圓撰
- 五體字鑑十二卷 松田舒撰

- ・攷正字彙一卷 (圖) 清版
- 古文官書一卷 漢衛宏撰 (大)
- (增訂)金壺字考十九卷 宋釋通之撰 (大)(內) 清版
- 增註校正頭書字彙十二集首末二卷補遺一卷 明梅賾撰 (內) 寬文版、天明版
- (增補註解)詩韻含英三卷 清劉文蔚君輯 (圖)(早)
- (增補)虛字註釋一卷 清張文炳撰 (南) 喜永版
- (增續)廣益會玉篇大全十卷 毛利瑚珀撰 (圖)(早) 元祿版 (內) 天保版、明治版
- 日本大玉篇不分卷 石川鴻齋輯 (大)(圖)
- (增訂)蒼頡訓詁一卷 漢杜林撰 (大)
- 蒼頡篇三卷 清孫星衍輯陶方琦補 (大)(圖)
- 蒼頡篇三卷 清任兆麟補正
- 蒼頡篇三卷 清陳其榮輯 (圖)
- 箋注和名類聚鈔十卷 狩谷望之撰 (大)
- 操觚字訣三卷 伊藤長胤撰 (大)(圖)
- 雜字指一卷 漢郭顯祖撰 (大)
- 雜字一卷 魏張揖撰 (大)
- 雜字解詁一卷 魏周成撰 (大)
- 三蒼一卷 魏張揖訓詁晋郭璞解詁 (大)
- 三音四聲字貫十二卷 高井伴寬輯市川清流校 (大)
- 三語字解虛字實字助字三卷 奈流芳於藝輯

- \*三台海篇正宗廿卷 明余象斗校訂 (河)
- 纂要一卷 梁武帝撰 (大)
- 纂要一卷 宋顏延之撰 (大)
- 纂文一卷 宋何承天撰 (大)
- 支雅二卷 清劉燦撰 (河)
- 詩韻合璧五卷 清湯文壽撰 (圖)(早)
- 詩韻集成四卷 清余照春撰 (早)
- 七經孟子考文補遺一百九十九卷 山井四撰 (大)
- 字海明珠十五卷 明翁正春撰 (內) 明版
- 字函六卷 清周家棟撰 (圖)
- 字考二卷 明夏宏撰 (明黃元立續訂一卷) (圖)(內) 慶安版
- 字學元元十卷 明袁子讓撰
- 字學正本五卷 清李京撰
- \*字鑑五卷 元李文仲撰 (大)(內)(圖)
- 字義一卷 田中順撰 文政版
- 字義總略四卷 明顧充撰
- 字鏡考一卷 昨非庵是翁撰 (內) 寫本
- 字貫四十卷檢具十二卷首一卷 清王錫侯撰 (大)(內)(圖)
- 字貫提要四十卷 清王錫侯撰 (內)(圖) 天保版
- 字典攷證十二卷 清王引之撰 (大)(圖)

- 字詁一卷 清黃生撰
- 字音假字用格存疑一卷 (岩) 岡本保孝手稿本
- 字指一卷 晋李彤撰
- 字統一卷 楊承慶撰 (大)(圖)
- 字通一卷 宋李從周撰 (大) 知不足齋叢書本
- 字林考逸八卷補一卷 清任大椿撰陶方琦補 (高)
- 字辨七卷 清熊文登撰 (大)
- 字林一卷 宋呂忱撰 (大) 說郭本
- 字類標韻二卷 清維寧華編輯 (圖)
- 字類編覽漢對譯一卷 釋行智輯 (內) 天保版
- 字彙四卷 明葉秉敬撰 (內) 日本寫本
- 字詁義府合按三卷 清黃生撰黃承吉註 (河)
- \*字彙十二卷首末二卷 明梅膺祚撰 (圖)(內) 明版、清版、寬文版
- 字學大全三十二卷 明王三聘輯 (內) 明版
- 字學同文四卷 清衛執毅撰
- 字考啓蒙十六卷 明周宇撰
- 爾雅注三卷 晋郭璞注 (大)(圖)(聽)
- 爾雅演四卷 五井純禎撰 (圖) 寫本
- 爾雅音義一卷 晋郭璞撰 (大)
- 爾雅義疏二十卷 清郝懿行撰 (大) 皇清經解本

- 爾雅匡名二十卷 清嚴元熙撰 (大) 續皇清經解本
- 爾雅廣義十一卷 清周夢齡輯 (大)(南)(岩)
- 爾雅經注集證三卷 清龍啓瑞撰 (大) 續皇清經解本
- 爾雅古義二卷 清錢坫撰 (大) 續皇清經解本
- 爾雅古義十二卷 清胡承珙撰 (大)
- 爾雅顧氏音一卷 陳顧野王撰 (大)
- 爾雅釋地四篇註四卷 清錢坫撰 (大) 續皇清經解本
- 爾雅釋文三卷 唐陸德明撰 (內)
- 爾雅新義二十卷 宋陸佃撰 (大) 粵雅堂叢書本
- 爾雅正義二十卷 清邵晉涵撰 (大)(圖)(內) 皇清經解本
- 爾雅孫氏音一卷 魏孫炎撰 (大)
- 爾雅孫氏註三卷 魏孫炎撰 (大)
- 爾雅註三卷 晉郭璞註明馬諒校本 (內) 明版 明鐘人傑校本 (內) 明版 古逸叢書本 格致叢書本
- 爾雅註疏十一卷 晉郭璞註宋邢昺疏 (大)(內) 宋版、明版、朝鮮版、文久版、汲古閣本
- 爾雅註三卷 宋鄭樵撰 (大) 學津討原本 津逮秘書本
- 爾雅註疏考證十一卷 清段照撰 (內)
- 爾雅裴氏註一卷 唐裴瑜撰 (大)
- 爾雅樊氏註一卷 漢樊光撰 (大)
- 爾雅漢注三卷 清臧輔堂撰

- 爾雅補郭二卷 清翟灝撰 (大) 咫進齋叢書本 續皇清經解本
- 爾雅補注六卷 清姜兆錫撰
- 爾雅注疏參議六卷 清姜兆錫撰
- 爾雅名物考 小野蘭山、寺尾顯融全撰 (圖) 寫本
- 爾雅蒙求二卷 清李拔式撰 (圖)(內)
- 爾雅音圖三卷 重刊影宋本 晉郭璞註
- 爾雅翼三十二卷 宋羅願撰 (內) 明版 (大) 學津討原本 格致叢書本
- 爾雅李氏註三卷 漢李巡撰 (大)
- 爾雅劉氏註一卷 漢劉韻撰 (大)
- 爾言解乾集二卷 (內) 寫本
- 助語辭一卷 明盧以緯撰 (內) 日本寫本 (大)
- 助語辭三卷首一卷 三好似山輯 (內) 元祿版
- 四聲玉篇和訓大成六卷 中野煥輯 (內) 寬政版
- 四明海編十三卷 明吳亮英 (內) 明版
- 史籍篇一卷 周宣王太史撰撰 (大)
- 實字解 皆川恩撰 (內) 刊本
- 支那語助辭用法附應用問題及答解 青柳萬恒輯
- 拾雅注廿卷 清夏味堂注 青照堂叢書本 (河)(圖)
- 證俗文十八卷 清郝懿行撰 (河)
- 舒藝室隨筆六卷續筆一卷餘筆三卷 清張文虎撰 (河)

- 詳校篇海五卷 明李登校 (内) 明版
- 諸書字考二卷 明林茂槐撰
- 小説字林一卷 桑野銳撰 (内)
- 小説俗語大全卷二卷 穂積以貫撰寫本
- 小學攷五十卷 清謝啓昆撰 (大)(河) 原刊本
- 小學鈎沈十七卷 清任大椿撰 (圖)
- 小學鈎沈續編八卷 清顧震福撰 (河)
- 小學類編 清李祖望輯 (後) 惠氏讀說文記 惠陳撰、說文校讎 姚文田、嚴可均同撰、說文答問 錢大昕撰、說文經字考 棟 蔚撰、六書說 江聲撰、說文釋例 江沅撰、說文舊音 畢沅撰、爾雅古注附三卷 葉惠心撰
- 小爾雅一卷 李軌註孔叢子本 (大)(内)(圖)(早) 說郭本 格致叢書本 漢魏叢書本 顧氏小說本 百川學海本 龍威秘書本
- 小爾雅約注一卷 清朱駿聲撰 (河)
- 小爾雅疏證五卷 清葛其仁撰 (大) 咫進齋叢書本
- 小爾雅疏證八卷 清王煦撰 (大)
- 小爾雅訓纂一卷 清宋翔鳳撰 (大) 續皇清經解本
- 小爾雅疏證一卷 增島固撰 (内) 寫本
- 小爾雅義證十三卷補一卷 清胡承瑛撰 (河)
- 集爾雅三卷 梁沈旋撰
- 釋名八卷 漢劉熙撰明畢效欽校 (大)(内)(圖) 格致叢書本 漢魏叢書本 廣漢魏叢書本 古經解彙 函本 和板
- 釋名補證一卷 清成蓉鏡撰 (圖)
- 釋名疏證八卷 附補釋名一卷續釋名一卷 清畢沅撰江聲叢書本 (大)(内) 新刻釋名八卷劉熙撰明畢效欽校 (内) 明版

- 釋名四卷 漢劉熙撰明鍾惺評 (内) 明版
- 助字解一卷 三宅謙明撰 (早)
- 助字考一卷 伊藤長胤撰 (内) 寫本
- 助字鶴一卷 河北景楨輯 天明版
- 助辭新譯二卷 東條一堂口談男詰附載孫長世等撰 (大)
- 助字通解一卷 富永貢撰 (内) 嘉永版
- 助辭燈一卷 萩原乙彦撰 (早)
- 助辭譯通三卷 岡白駒撰 刊本
- 詞林韻釋二卷 宋孫斐軒撰 (大) 粵雅堂叢書本
- (新增)說文韻府群玉二十卷 元陰時夫撰 (内) 明版
- 新編遠東語類 清喬德備輯
- 清文鑑名物語抄六卷 高橋景保撰 (内) 寫本
- 清文鑑名譯語抄六卷補遺一卷 (内) 寫本
- 新撰字鏡一卷 釋昌住撰 (大)(内) 寫本、享和版 (附)考異一卷、丘岬俊平校 (南) 寫本、享和版 (博) 鈔本、群書
- 新撰字鏡師說抄 藤井五十足撰 (南) 文化版
- 新撰字鏡類語 (南) 寫本
- 新方言一卷 清章炳麟撰 (河)
- 成語字彙三卷 (圖) 寫本
- 正字通十二卷 明張自烈撰 (大)(内) 清版 (十二字頭一卷廖輪瓊撰)
- 正字通俗攷一卷 (南) 寫本

類聚本、同書經濟誌社續刻本



- 石齋海篇三集三十八卷 明黃道周撰 (内) 明版
- 說文引經攷二卷補遺一卷 清吳玉搢撰 (大) 咫進齋叢書本 原刊本 (河)
- 說文解字句讀三十卷 王筠撰 (大) (早)
- 說文解字義證五十卷 清桂馥撰 (大) (圖) 清版
- 說文解字注十五卷 清段玉裁撰 (大) 經韻樓本皇清經解本小知行簡訓點本止七卷後未刊
- 說文解字疏二卷 岡本保孝手稿本 (二卷) 及一卷本
- 說文解字注匡繆八卷 清徐承慶撰 (河)
- 說文段注辨疏一篇二篇稿本 高田忠周撰
- 說文義例一卷 清王宗誠撰 (圖) 昭代叢書本
- 說文廣義三卷 清王夫之撰 (大) (圖)
- 說文廣義十二卷 清程德治撰
- 說文廣義校訂三卷 清吳善述撰 (河)
- 說文釋例廿卷 清王筠 (大)
- 說文釋例二卷 清江沅撰 (大)
- 說文新附字考證一卷 岡本保孝撰抄
- 說文古語攷補正一卷 清傅雲龍撰 (圖)
- 說文引經攷八卷 清陳瑒撰 (河)
- 說文徐氏未詳說一卷 清許澹群撰 (河)
- 說文經傳異字釋一卷 清高翔麟撰 (河)
- 說文引經例辨一卷 清雷浚撰 (河)

- 說文引經攷異十六卷 清柳榮宗撰 (河)
- 說文本經答問二卷 清鄭知同撰 (河)
- 說文發疑六卷 清張行孚撰 (大) 後知不足齋本 (河) 單行七卷本
- 說文職墨三卷 清于粵撰 (圖) 南菁書院叢書本
- 說文指染二卷 清吳楚撰 (高)
- 說文五翼八卷 清王煦撰 (河)
- 說文述誼二卷 清毛際盛撰 (高)
- 說文經字正誼四卷 清郭慶藩撰 (河)
- 說文統釋序注一卷 清錢大昭撰 (河)
- 說文段注訂補十四卷 清王紹蘭撰 (大)
- 說文答問疏證六卷 清薛傳均撰 (大) 咫進齋叢書本
- 說文長箋一百四卷 明趙宦光撰 (大) 明版
- 說文緯三十卷 山梨治憲手稿本 (南) (大) 刊本
- 說雅一卷 清朱駿聲撰 (大)
- 全韻玉篇二卷 (大) (圖) (早) 朝鮮版 (南) 刊本
- 俗字一卷 明揭傒斯 (大) 爾雅本
- 俗語錄一卷 野子苞撰 (圖) 元祿版
- \*續字彙補十二卷 清吳任臣撰 (大) (内) 寬文版 (圖) 寬政版
- 續廣雅三卷 清劉燦撰 (河)
- 續方言二卷 清杭世駿撰 (大) (圖) 藝海珠塵本 昭代叢書本

- 續方言又補二卷 清徐乃昌撰 (河) 一部
- 續方言補正一卷 清程際盛撰 (圖) 藝海珠塵本
- 臺閣海篇二十卷 明曾六德撰 (內) 明版
- 體格字府二十卷 (圖) 寫本
- 大清文典一卷 美國高第不清國張儒珍同撰 (大)(內)
- 大明同文集舉要五十卷 明田藝衡撰 (內) 明版
- 谷氏助字解三卷 谷響撰 天明版
- 段氏說文十五卷 說文解字註に同じ
- 段氏說文註訂八卷 清鈕樹玉撰
- 重刊玉篇三卷 清朱彝尊校 (圖) 天保版
- 通用字考五卷 明顧起淹撰 (內) 明版
- 通話二卷 清李調元撰 (大) 函海本
- 通叶集覽二卷 清王鳴玉撰 (圖)(內) 文化版
- 通俗文一卷 後漢服虔撰 (大)
- 通雅五十二卷 明方以智撰 (大)
- 疊雅十三卷 清史夢蘭撰 (河)
- 訂正篇海十卷 明張忻校 (內) 明版
- 篆隸萬象名義卅三卷 釋空海撰 (博)
- 轉注古義考一卷 清曹仁虎撰 (大)(早)
- 轉註說一卷 狩谷望之撰 (大)(圖) 嘉永版

- 轉註說補遺 狩谷望之撰抄本
- 轉注假借論一卷 高田忠周撰
- (篆文) 鳳文會玉篇大全六卷 石川英輯 (圖)
- 續說文雜識一卷 清許慎撰 (大) 許學叢書本
- 續說文記一卷 清許慎撰 (河)
- 頭字韻五卷 清餘春亭輯 (大)(內) 天保版
- 同文鐸十卷 明吳維祺輯 (圖) 清版
- 同文玉海八卷 明黃道周撰 (圖)
- 同文考略四十五卷續輯二十卷 清司諱院撰 (內) 清版
- 同文通考四卷 新井白石撰 (大)(圖)(早) 寶曆版
- 徒杠字彙四卷 金內格三郎撰 (圖)
- 南山俗語考五卷 (圖) 文化版
- 難字訓三卷 井澤長秀撰 (圖)
- 馬氏文通十卷 清馬建忠撰 (大)
- 文通十卷 前條に同じ
- 佩觿三卷 宋郭忠恕撰 (大)(圖) 說郭本
- 佩文韻府四百四十四卷 清張玉書等奉勅撰 (大)
- 佩文韻府拾遺一百〇六卷 清張廷玉等奉勅撰 (大)
- 方言十三卷 漢揚雄撰晋郭璞註 (大) 格致叢書本、漢魏叢書本、廣漢魏叢書 (內) 明版、元祿版
- 方言類聚四卷 明陳與郊撰 (內) 明版

- 方言據二卷 明魏涪撰
- 方言藻二卷 清李調元撰 (大)(内)(圖) 函海本漢魏叢書本
- 方言箋疏十三卷 清錢繹撰 (高)
- 方言疏證十三卷 清戴震撰 (高)
- 博雅十卷 (廣雅に同じ) 漢張揖撰 (大) 漢魏叢書本、廣漢魏叢書本 (圖)
- 博古全雅七十五卷 明畢効欽校 (内) 明版
- 凡將篇一卷 漢司馬相如撰 (大)
- \*班馬字類五卷 宋婁機撰 (大)(内) 明版 (圖) 清版
- 聖軒詞韻一卷 (圖) 清版
- 坤雅二十卷 宋陸佃撰 (大)(内) 明版、朝鮮版
- 坤雅廣要四十二卷 明牛衷撰 (大)
- 比雅十九卷 清洪亮吉撰 (大)(圖)
- 彬雅八卷 清墨莊氏撰 (圖)
- 坤蒼一卷 魏張揖撰 (大)
- 物數稱謂一卷 岡田挺三撰 (圖) 寛文版
- 文釋一卷 宋江邃撰 (早)
- 文會堂詞韻二卷 附一卷 明胡文煥輯 (内) 明版
- 文語解 明霞先生輯 (南) 明和版
- 分毫字樣一卷 (大)
- 文緯 (說文緯に同じ)

- 併音連聲字學集要四卷 明陶承學等撰 (内) 明版
- 別雅五卷 清吳玉搢撰 (大)(河)
- 別雅訂五卷 清許翰撰 (河)
- 篇韻貫珠集一卷 明釋真空撰 (内) 明版
- 駢雅七卷 明朱謀埠撰 (大) 明版、寫本
- 駢雅訓纂十六卷 明朱謀埠撰清魏茂林訓纂 (高)
- \*篇海十卷 明趙年伯輯 (圖) 明版
- \*篇海類編二十卷 明宋濂撰 (大)(圖)(大) 明版、寛文版
- 駢志不分卷 明陳禹謨輯 (南) 寫本
- 辨釋名一卷 吳章昭撰 (大)
- 駢字分箋一卷 清程際盛撰 (圖)(南)(早) 藝海珠塵本、昭代叢書本
- 駢字類編二百四十卷 康熙勅撰 (圖)
- 滿漢成語對待四卷 不著撰人名氏 (内)
- 滿漢六部成語六卷 不著撰人名氏 (内)
- 滿漢字清文啓蒙四卷 清舞格撰
- 滿漢同文物名類集一卷 寫本
- 蒙古譯語一卷 不著撰人名氏
- 蒙古晰義附三合便覽 正說補遺 清資尙輯
- 譯文萃蹄二篇九卷 荻生茂綱撰 (大) 正徳版文政版
- 譯文明辨四卷 穂積以貫撰池田觀校 (内) 明治版

- 譯文須知三卷 松本慎撰鶴飼良輔校 (内) 明治版  
 譯名字類一卷 中柴中輯 慶應版  
 輔軒使者絶代語釋別國方言 (方言と同じ) 清載震疏證、寫本 (大)  
 要用字苑一卷 晋葛洪撰 (大)(圖)  
 陸氏要覽一卷 晉陸機撰 (大)(早)  
 六經字便一卷 清劉臣敬撰  
 \*六書轉注錄十卷 清洪亮吉撰 (圖)(早) 洪北全集本  
 臨文便覽不分卷 原刊本 (後)  
 類聚助語二百義九卷 小幡儀太郎撰  
 類篇四十五卷 宋司馬光撰 (内)  
 類字本意無卷數 清莫宏動撰  
 連文釋義一卷 清王言撰 (圖)(内) 昭代叢書本 文久版  
 和名類聚鈔廿卷 源順撰 狩谷望之手校本、古鈔本、同上本及竹村茂雄手抄 真福寺本  
 和名鈔箋注附錄二卷 狩谷望之手稿本  
 倭爾雅八卷 貝原好古撰 (大)

### 六 文字音韻言語に關する西人の著述

#### 一、支那の部

- Aurel Stein, K. C. I. E.  
 Documents Chinois 1913  
 Aurel Stein, K. C. I. E.  
 The thousand Buddhas.  
 Ancient Buddhist paintings from the Cave-temples of Tun-huang on the Western  
 frontier of China. 1921  
 Acheson, J.  
 Index to Dr. Williams' Syllabic Dictionary of the Chinese language. 1887  
 Analytical Vocabulary of the Mandarin Dialect for the use of the beginners. 1887  
 Arendt, C.  
 Einführung in die nordchinesischen Umgangssprache mit der chinesischen Übersetzung  
 der Übungsbeispiele. 1894  
 Arendt, C.  
 Handbuch der nordchinesischen Umgangssprache. (後) 1890  
 Astnor, W.  
 Primary Lessons in Swatow grammar. 1884

文字音韻言語に關する西人の著述

- Baldwin, Rev C. C.  
A Manual of the Foochow dialect.  
榕腔初學撮要      Foochow.      1871
- Ball, J. Dyer.  
An English Cantonese Pocket Dictionary.      1894
- Ball, J. Dyer.  
Hakka made Easy.      1896
- Ball, J. Dyer.  
The Cantonese made Easy Vocabulary.      1892
- Ball, J. Dyer.  
The Hong Shan or Macao Dialect.      1897
- Ball, J. Dyer.  
The San-win Dialect.      1890
- Ball, J. Dyer.  
The Tang-kwin Dialect.      1893
- Baller, F. W.  
Analytical Vocabulary of the New Testament (in the Mandarin dialect).  
Supplement—.
- Baller, F. W.  
Mandarine Primer.      Shanghai.      1894

- Bell, G. A.  
Manual of Colloquial Tibetan.      Calcutta:      1905
- Bazin, A.  
Grammaire Mandarine, ou Principes généraux de la langue chinoise parlée.      Paris      1883
- Bazin, A.  
Mémoire sur les principes généraux du chinois vulgaire.      paris      1875
- Bourgeois, G.  
Caractères idéographiques. 簡易說文解字      Tokyo.      1909
- Callery, J. M.  
Dictionaire encyclopédique de la langue chinois.      1845
- Karlgren, Bernard  
Word families in China.      1934
- Chalmers, John.  
Origin of the Chinese Hongkong.      1866
- Chalmers, J.  
Concise Dictionary of Chinese on the basis of Kanghi.      1881
- Chinese-romanized dictionary of the Formosan vernacular. 中西字典.      上海      1898
- Chouzy, J. B.  
Recueil d'expressions et phrases chinoises du style chinois écrit.      1894

- Csoma de Kóros, A.  
Grammar of the Tibetan Language. 1834  
Damamika, oder der Weise und der Thor.  
Aus dem Tibetischen über und mit dem Originaltexte peranag von. J. J. Schmidt.  
St. pet. 1845
- Debesse, A.  
Petit dictionnaire chinois. 1900—1901
- Dennys, N. B.  
Handbook of the Canton Vernacular of the Chinese Language. Hongkong. 1874
- Des Michels, A.  
Manuel de la langue chinois écrite. 1888
- Devan, T. T.  
The Beginner's first book or Vocabulary of the Canton. 1858  
Dictionnaire de la langue mandarine parlée dans les missions de l'ouest de la Chine avec  
un vocabulaire francais-chinois, par plusieurs missionnaires du Su-Tshuen méridinal.  
Hongkong. 1893
- Doolittle, J.  
Vacabulary and handbook of the Chinese romanized in the Mandarine dialect. Foochow. 1872
- Douglas, Prof. R. K.

Chinese Language and Literature.

- Douglas, Prof. R. K.  
Chineseische Sprache und Literatur, frei bearbeitet von. Dr. W. Ihs Henkel. Jener. 1877
- Douglas, R. K.  
Chinese manual. 1889
- Ducat, R. K.  
Elementary manual of the Pekinese Dialect 1898
- Edkins, J.  
A vocabulary of the Lechanghai dialect. Shanghai. 1869
- Edkins, Joseph.  
China's place in philology. London. 1871
- Edkins, J.  
Evolution of the Chinese Language as exemplifying the origin and growth of human  
speech. 1888
- Edkins, Joseph.  
Grammar, A, of Chinese colloquial language commonly called the mandarin dialect. 2 ed. 上海 1861
- Edkins, J.  
Grammar of colloquial Chinese, as exhibited in the Shanghai Dialect. 1868

- Edkins, J. Progressive Lessons in the Chinese spoken language. 5 ed. 上海 1885
- Eitel, V. J. Chinese Dictionary of the Cantonese Dialect, with supplement. 1877—87
- Eitel, V. J. Handbook for the students of Chinese Buddhism being a Sanscrit-chinese Dictionary, with  
Vocabularies of Buddhist terms in Pali, Singhalese, Burmese, Tibetan, Mongolian and Japa-  
nese. 2 ed. 1888
- Foucaux, Ph. Od. Grammaire de la langue Tibetaïne Paris. 1857
- Gabelenz, G. von der. Anfangsprache der chinesischen Grammatik. 1883
- Gabelentz, G. v. der. Beiträge zur chinesischen Grammatik. 1888
- Gabelentz, G. v. der. Chineschen Grammatik. Leipzig. 1881
- Georgius, Fr. Augustinus. Antonius. Alphabetum Tibetanum missionium apostolicarum commodo editum. Romae. 1762
- Gibson, G. C. Radical Index to the Dictionaries of Wells Williams and C. Douglas. 1886

- Giles, H. A. Chinese English Dictionary. 1892
- Giles, H. A. Handbook of the Swatow Dialect. 1877
- Giles, H. A. Some translations and mistranslations in William's dictionary.
- Gordon-Cumming, C. F. The inventor of the numeral type for China. 1898
- Gourdin, F. Premières études de la langue mandarine parlée. 1896
- Grainiger, A. Western Mandarin. 1900
- Grube, W. Beiträge zur chinesischen Grammatik der Sprache Hiet-tü. S—A. 1889
- Harlez, C de. Manual der sinologie. 1891
- Hess, E. Chinesische Phraseologie mit ausführlicher Grammatik. 1891
- Hirth, F. Notes on the Chinese Documentary Style. 1888

- Hodgson, B. H. London. 1874  
 Language Literature, etc of Nepal and Tibet.
- Hopkins, L. C. 1900  
 The guide to Kuan hua 官話指南  
 A translate of the "Kuan hua chih nan" with an essay on tone and accent in Pekinese  
 and a glossary of phrases. 3 ed. Shanghai.
- Imbault-Huart, C. 1892  
 Manuel de la langue chinoise parlée à l'usage des Francais,
- Jenner, T. 2 ed. 1907  
 字典標目
- Jaeschke, H. A. 1865  
 A short practical grammar of the Tibetan Language.
- Jaeschke, H. A. 1871  
 Handwörterbuch der tibetischen Sprache.
- Jaeschke, H. A. 2 ed. 1883  
 Tibetan Grammar.
- Julien, Stanislas. Pasis. 1842  
 Exercises pratiques d'analyse, de syntaxe de lexicographie Chinoise.
- Julien, St. 2 vols. 1869—70  
 Han-wen-tchi-nan. Syntaxe nouvelle de la langue chinoise

Kainz, C.  
 Praktische grammatik der chinesischen Sprache mit einem chinesisch-deutsch und dusetch-chinesischen Wörterbuch und zehn commentierten Schrifttafeln. 2 ed. 1900  
 Kainz, C.  
 Praktische grammatik der chinesischen für den selbstunterricht.

Wien

- Kidel Samuel. 1838  
 Lecture on the Chinese Language.
- Kingsmill, T. W.  
 Ancient Language of the Chou, notes on the Shi-king.  
 Kuehnert, F.  
 Syllabar des Nanking Dialectes. 1898  
 Kuhnert, F.  
 Zur Kenntniss I älteren Lautwerthe der chinesisich. S—A. 1890  
 Lacouperie, Terrien de.  
 Les langues de la China avant les chinois resharches sur les langues des populations aborigenes et immigrantes, l'arivée des chinois leur extension progressive dans la chine propre et les sources de leur civilisation. Edition Francaise avec introduction, additions et appendices. Par. 1888  
 Lacouperie, T. d.



- The languages of China before the Chinese, Researches on the languages spoken by the  
Prechinese races of China-proper previously to the Chinese occupation. Lond. 1887
- Lagarrie.  
Elemente de langue chinoise, dialect cantonais, notation quoe Ngur, l'usage de Européens.  
1900
- Laming, R.  
Méthode pour apprendre les principes généraux de la langue chinoise. 1889
- Leaman, Ch.  
General romanization of the Mandarin dialect. 1897
- Leaman, Ch  
1200 Mandarine syllables in five systems of spelling. 1894
- Lewin, T. H.  
Manual of Tibetan. Calcutta. 1879
- Lewin, T. H. and Y. U. Gyatsho.  
Manual of Tibetan. 1879
- Lin Hiong Sing.  
Handbook of the Swatow Vernacular. 1886
- Mc Gowan, J. A.  
Manual of the Amoy Colloquial. 3 ed. 1892
- Mc Ilvaine, J. S.

- Grammatical study in the Mandarin dialect 1880
- Maclay, R. S. and Baldwin, C. C.  
Alphabetical Dictionary of the Chinese Language in the Foochow Dialect. 1870
- Mainwaring, G. B.  
A Grammar of the Rong (Lepche) Language. 1870
- Mainwaring, G. B.  
Dictionary of the Lepcha Language, revised and completed by A. Gruenwedel. 1899
- Morrison., R.  
A dictionary of the Chinese Language, 五車韻府. London. 1865
- Mayers.  
Chinese reader's manual.
- Meanows, Thomas Tayler.  
Desultory notes on the government and on the Chinese Language. London. 1847
- Merz, C.  
De Pronominum primae personae in libris 書經 et 詩經. 1882
- Moellendorff, P. G. von.  
Praktische Einleitung zur Erlernung der hoch-chinesischen Sprache. 1900
- Montgomery, P. H. S.  
Introduction to the wenchow dialect. 1893
- Morrison, R.

- Dictionary of the Chinese Language.  
Plath.  
Über die Tonsprache der alten chinesen.  
Pfizmaier.  
Für Geschichte der Erfindung der chinesischen Schriftgattungen.  
Paletti.  
Wien. 1872
- Dictionary of the Chinese Language  
Prémare. Joseph Henri de.  
1849
- The notitia Linguae Siniacae of prémare transl. into English by J. G. Bridgman.  
Canton. 1849
- Rabouin, Père.  
2 vols. 194—96
- Dictionnaire francais-chinois, dialecte de Chang-hai.  
Ramusat, Abel.  
Paris. 1858
- Éléments de la grammaire chinoise, ou principe généraux du *Kou-wen* on style antique,  
et eu *Kouan-hoa*.  
Paris. 1858
- Ramsay, H.  
Western Tibet. A practical dictionary of the language and customs of the districts included  
in the Ladak Wagarat.  
1890
- Rochet, Louis.  
Manuel pratique de la langue Chinoise Vulgaire.  
Paris. 1846

- Rosny, Léon de.  
Dictionnaire des signes ideographiques de le China, avec leur prononciation usitée au Japon  
Par. 1867
- Table des principes phonétique chinoises.  
Sandbery, G.  
Paris. 1858
- Handbook of Colloquial Tibetan.  
Rosny, L.  
1894
- Manual of the Sikkin Bhutia Language or Dénjong Ké.  
Schaank, S. H.  
2 ed. 1895
- Het Loeh-Foeng Dialect.  
Schlegel, G.  
1897
- The secret of the Chinese method of Transcribing Foreign Sounds.  
Schmidt, J. J.  
1900
- Grammatik I, tibetischen Sprache.  
Schott, W.  
4° 1839
- Chines Sprachlehre  
Seidel, A.  
4° 1857
- Chinesische konversationsgrammatik in Dialekt der nordchinesischen Sprache.  
Seidel, A.  
1901

- Kleine chinesische Sprachlehre im Dialect der nordchinesischen Umgangssprache. 1901  
2 vols
- Seidel, A. 1901  
Systematisches Wörterbuch der nordchinesischen Umgangssprache.
- Seidel, A. 1901  
Wörterbuch der nordchinesischen Umgangssprache.  
(Denkch-chinesisch) Berlin.
- Siebold, P. F. de. 1834  
Sin zoo zi lin gjok ben 新增字林玉篇 Lugduni Batavorum,
- Siebold, P. F. d. 1840  
T'sian dsü wên 千字文 London.
- Silsby, J. A. 1879  
Shanghai Syllabary arranged in phonetics with reference number to Wells Williams' Chinese Dictionary. 2 ed.
- Silsby. 1900  
The radicals for Shanghai students.
- Soothill, W. E. 1897  
The study of 400 Chinese characters and general pocket dictionary.
- Sumitomo Kichizaemon. 1921  
Explanatory notes on Sen-oku-Seisho. (泉屋清費)
- Summers, J. 1867  
Handbook of the Chinese language. 2 parts grammar and chrestomaty.
- Sydenstricker, A. 1889  
An exposition of the structure and idioms of Chinese Sentences as found in Colloquial Mandarin.
- Turner, P. H. P. 1897  
The Colloquial Language of Tibet.
- Uhle, M. 1881  
Beiträge zur Grammatik der vorklassischen Chinesisch.
- Uhle, F. Y. 1880  
Die Partikel 惟, Wei im Schuking und Shi-king. Ein Beitrag zur Grammatik des volksklasschinesisch.
- Volpicelly, Z. 1896  
Chinese phonology.
- Wade, Thomas. Francis. 1859  
The Peking Syllabary.
- Wade, Thomas Francis. 1859  
Yü-yen tzu-erh chi, a progressive course designed to assist the student of colloquial Chinese. 語言自集.
- Wade, Thomas Francis.

- 尋津録  
Watters, T.  
Essays on the Chinese Language. 1883  
Shanghai.
- Wiegner.  
Parler et style chinois. 1889  
Ho-kien-Fon. 1<sup>2</sup> vol.
- William, S. Wells.  
Syllabic Dictionary of the Chinese Language. Re-issued. 1896  
3 ed. 1890
- Yates, M. T.  
First Lessons in Chinese (in the Shanghai dialect). 1899  
字種學雜覽の附録
- Abbey, W. T.  
Manual of the Maru Language. 1899
- Adam, J. and Sandys, W. S.  
The Griffin guide to Burmese. 1899
- Anderson, J. D.  
Short Vocabulary of the Aka Language. 1896  
Anglo-Burmese grammatical Reader for Beginners. 1889
- Aubaret, G.  
Grammaire de la langue annamite 1867

- Baell, P.  
Contribution à l'étude de la langue lolo. 1899
- Bouche L'abbé Pierre.  
Etude sur la langue Naga (Yaronba). Bar-le-Duc. 1880
- Bronson, M.  
Phrases in English and Naga. 1840
- Bradley, Nus. E. R.  
Elementary table and lessons in the Siamese language. Bangkok. 1871
- Brown, N.  
Grammatical Notes on the Assamese Language. 3 ed. 1893
- Brown, B. J. R.  
Elementary Handbook of the Red Karen Language. 1900
- Brown, W. B.  
Outline grammar of the Deorichutiya Language. 1895  
Burmese Copy-book in eight progressive parts.
- Cadiér, L.  
Phonétique annamite. Paris. 1902
- Carpenter, C. H.  
The Anglo-Karen Hand-book and Reader. 1875
- Chase, D. A.

- Anglo-Burmese Hand-book. New-ed. 1890  
 Chéon et Mougeot.  
 Essai de Dictionnaire de la langue Chrau (dialect Moi). 1891  
 Clark, E. W.  
 Ao-Naga grammar with illustrative phrases and vocabulary. 1893  
 Cremieux, M.  
 Notions Tannamite vulgaire. 1900  
 Cushing, T. N.  
 Grammar of the Shan Language. 2 ed. 1887  
 Cuthing, T. N.  
 Elementary Hand-book of the Shan Shan Language. 1888  
 Custer, H. B. L.  
 Phrases in English and Assamese. 1877  
 Davenport.  
 Collection of Words and Phrases in English and Siamese. 1883  
 Davidson, F. A. L.  
 Burmese Manual. 1889  
 Des Michel Abel.  
 Des Michel Cochinchinois expliqués littéralement en français, en anglais et en latin, suivis  
 d'une étude philologique de texte et d'un exposé des monnaies, poids, mesures et division

- du temps en usage dans la Cochinchinois. Paris. 1871  
 Des Michels, Abel.  
 Discours prononcé à l'ouverture du cours de Cochinchinois, à l'école annexe de la Sorbonne. Paris. 1869  
 Dignet, Ed.  
 Elements de grammaire annamite. 2 ed. 1897  
 Dignet, E.  
 Etude de la langue Tai. 1895  
 Dirr, A.  
 Theoretisch-praktische Grammatik der annamitischen Sprache. Wien. 1891  
 Dumoutier, G.  
 Bai Tap Tien Au-nam. Exercices pratique de langue Annamite. Hanoi. 1889  
 Edkins, Dr. J.  
 The Mau-Tse, with Vocabulary of the Miao Dialect. Foochow.  
 Endle, S.  
 Outline grammar of the Kachau (Bara) Language, as spoken in District Darrang, Assam. 1884  
 Estrade.  
 Dictionnaire et guide franco-laotiens. 2 ed. 1895  
 Evans, K. F.

- Elementary Anglo-Vernacular grammar.  
(for Burmese to learn English). 2 ed. 1890
- Ewald, Z. 1881  
Grammatik der Tai, or Siamesischen sprache.
- Frankfurter, O. 1900  
Éléments of Siamese Grammar.
- Frey, col. 1892  
L'Annamite, mère de langueses.
- Gallois, E. 1874  
La langue et la littérature du royaume Thai ou de Siam.
- Gilmore, D. 1898  
A grammar of the Sgaw-Karen Language.
- Gordon, H. K. 1886  
Comparison to the Handbook of Colloquial Burmese.
- Gordon, H K. 2nd ed. 1886  
Handbook to Colloquial Burmese.
- Gouzien, P. 1897  
L'intonation et la prononciation Annamite.
- Gouzien, P. 1897  
Manuel franco-tonkinois de conversation.

- Gunasekara, A. M. 1892  
Siamese grammar.
- Hamilton, R. C. 1900  
Outline Grammar of the Daffa Language, as spoken by the tribes immediatdy south of the  
Apa Tanang country.
- Hanson, O. 1896  
Grammar of the Kochin Language.
- Hanson, O. 1896  
Grammar of the Kochin Language.  
(with a Vocabulary)
- Harnard, J. 1884  
Birmanie, Résumé ethnographique et linguistique, traduit du British Burmath gazetteer  
avee annotation. Paris. 1884
- “Hemkosha” by the late Srijit Hem Chandra Barua of Ganhati. 1900  
(An etymological Dictionary of the Assamese Language).
- Hertz, H. F. 1895  
Handbook of the Kochin or Chingpaw Language.
- Janneau. 1870  
Manuel pratique de la langue Cambodienne.  
Jourdain,

- Grammaire annamite. 1872
- Judson, A. 2nd ed. 1888
- A. grammar of the Burmese Language. 1874
- Ko Shway Bwen. 1890
- A new and complete grammar of the Burmese Language. 1898
- Laune, H. Book I II. 1899
- Notion pratiques de langue annamite fondée sur l'étude séparé des tonalités. 1920
- Lonstdale, A. W. 1820
- Analysis of Burmese sentences. 1887
- Lonstdale, A. W. 1894
- Burmese grammar and grammatical analysis. 1820
- Longeon, E. 1887
- Grammaire siamoise. 1894
- Low, J. 1820
- Grammar of the Thai; or Siamese Language. 1887
- Mc Cobe, R. B. 1894
- Outline Grammar of the Angami Nāgā Language. 1820
- Massie, M. 1887
- Dictionnaire laotien. 1894
- Michels, Avel des. 1820

- Dialogue en Langue Cochinchinois. Paris. 1869
- Morice, A. 1875
- Etude sur deux dialectes de l'Indo-china. Les Tiams et les Stiengs. Paris. 1894
- Needham, J. F. 1886
- Outline grammar of the Khamti Language. 1889
- Needham, J. F. 1878
- Outline Grammar of the Shaiying Miri Language. 1850
- Needham, J. F. 1887
- Outline grammar of the Shingpho Language. 1894
- Nicholl, F. 1888
- Assamese Grammar. 1820
- Notions Pour servir a l'étude de la langue annamite. 1850
- Pallegoix, D. J. B. 1887
- Grammatica linguae Thai. 1894
- Phinney, F. D. and Eveleth F. H. 1888
- A Burmese Pocket Dictionary. 1820
- St. Andrew, St John, R. F. 1894
- A Burmese Reader. 1888
- Slack, C. 1820
- Manual of Burmese. 1888

- Sloan, W. H. 2nd ed. 1887  
 A Practical Method of the Burmese Language.  
 Soppit, C. A. 1885  
 Short Account of the Kachcha Naga (Empeo) Tribe in the North Cachar Hills, with an outline grammar, vocabulary and illustrative sentences.  
 Symington, A. 1892  
 Kachin Vocabulary.  
 Tables for the Transliteration of Burmese into English. 1896  
 Taw Sein ko. 1898  
 Elementary handbook of the Burmese language.  
 Tun Maung. 1898  
 The Letter-writers Vate-Mecum. 1898  
 (a treasury of phrases in English and Burmese) Part I.  
 Truong-Vinh-ky, P.-J.-B. 1884  
 Grammaire de la langue annamite.  
 Truong-Vinh-ky, P.-J.-B. 1885  
 Guide de la conversation annamite.  
 Truong-vinh-ky, J. B. 1872  
 Mes Luât Day Hoc Tiêng Pha-lang-sa, abrégé de grammaire annamite.  
 Vial, P.

- Les Lolos, Histoire, religion, langue, moeur, écriture. 1898  
 Vossion, L.  
 Grammaire franco-birmane d'après A. Judson. 1899  
 V. P. G.  
 Grammaire annamite a l'usage des Francais l'Annam et du Tonkin. 1897  
 Wade, J.  
 Karen Vernacular Grammar. 2 ed. 1888  
 Wershoven.  
 Lehr und Lesebuch der siamisischen Sprache und deutsch-siamisisches Wörterbuch. 1892  
 Wien.  
 Witter, W. E. 1888  
 Outline Language, with a vocabulary and illustrative sentences.  
 Wright, E. 1877  
 The Anglo-Burmese Student's assistant.

西人の研究其のものゝ深淺如何は兎に角として、常に彼等が東洋研究に深い興味を有し、着々研究の結果を公刊する美風は吾人のいつも美望に堪えないところである。然し輓近の世態を見るに言葉や、文字の研究心が東西兩洋、恰も時を同じうして勃興して來たとは返す返すも喜ばしきことで、吾人は此の際鋭意以つて濶古知新の實を擧げて行かなくてはならぬと私かに考へて居る次第である。



世評の惑ひを解く

- 一、文字の研究は要するに支那學の建設に資するに在り、牽いては一般社會、教育界の爲に現行漢字の整理を行ひ、旁、世に文字趣味を解せしむるに在るのである。
- 二、既に久しい歴史を有する關係上漢字は我國字の精華となり、國民の漢字感、亦動かす可からざるものがある。國字の溯源に無限の興味を感ずるは蓋し此れが爲である。
- 三、世に如何に羅馬字論が時めいて來ても漢字の研究には毫も痛傷は感じない。萬一舉國一致漢字全廢の決行せられた時期が來よう共神聖なる漢字研究は依然一意専心研究的態度で進んで行つて然る可きものと信ずる。
- 四、羅馬字を研究するには漢字を味ひ、漢字を研究するには羅馬字を味はなくてはならぬ。健全なる漢字の新聞拓には益この羅馬字運用の必要がある。
- 五、羅馬字論は文字上の論にして、言語上の論に非ず。畢竟和服を脱いで、洋服に着換へさせたいと云ふ趣意であれば漢語を大和語化し又は洋語化するの論とは全く別なのである。

文字の研究 終

發音假名索引

あ	
アイヌ語	二〇五
アイヌ語數詞	五〇三
アイランド語	二〇七
アイ音の推定	二〇八
アカツドの刻文	二〇九
アケセント	二一〇
アツシリア	二一一
アツシリア文明記	二一二
アホム語	二一三
アメリカ印度人	二一四
アムール河	二一五
アラビア語狗	二一六
アラビア語	二一七
アラビア語の麒麟	二一八
アルタイ語分布	二一九
アルメニア語	二二〇
アレント	二二一
アングロサクソン語	二二二
アングロ、サクソン語大	二二三
アンダーウツド	二二四
亞字說	二二五
亞細亞の言語	二二六
亞細亞四大系語	二二七
亞細亞の遊牧民族	二二八
亞細亞東南の語	二二九
啞者	二三〇
蛙の字	二三一
廈門方言	二三二
廈門の入聲	二三三
廈門の俗音	二三四
廈門讀書音	二三五
廈門音比較	二三六
廈門音のウ	二三七
歴、立の變則音	二三八
荒稍	二三九
秋の字の歴史	二四〇
安息國	二四一
安南音	二四二
安南音比較	二四三
安南音の見解	二四四
安南字音	二四五
安南地名人名	二四六
安南語は支那語	二四七
安南の入聲	二四八
安南の數字	二四九
安南と朝鮮	二五〇
有果氏	二五一
イスパニア國	二五二
家の字	二五三
イヅラエル	二五四
意義の研究	二五五
イマン、ジャファア、サチク塔	二五六
イラーン語	二五七
殷墟文字類篇	二五八
インド、アーリアン語	二五九
殷氏の龜甲文	二六〇
殷墟書契	二六一
インドゲルマン語例	二六二
殷の時代	二六三
夷の字	二六四
彝の字の古形	二六五
異の音字	二六六
意義の列明	二六七
意義要素	二六八
意義系統	二六九
伊大利語	二七〇
伊犁天山	二七一
移住者の言語	二七二
已經	二七三
衣の字	二七四
胃の字	二七五
醫學文字	二七六
倭の字の古音	二七七
倭の三段音變化	二七八
倭の複合字	二七九

爲の字の歴史	1016	印歐言語學	565	ウラル語分布	1248	疊と寧の字	767
稻の字の古文	1017	印歐語	566	ウラルアルタイ語	569	埃及	1010
稻の字解割	1018	印度歐羅巴	567	ウサギ	570	英語	1011
稻と禾	1019	印度歐羅巴の音聲學者	568	ウキグル	571	英語と漢字	1012
飯島忠夫氏	1020	印度支那系統語	569	ウキグル音譯比較	572	英語の長音	1013
田舎に關する文字	1021	印度ゲルマンの音韻	570	ウエルナー	573	英語の勢力	1014
一の古音 Kat	1022	印度俗語の塔	571	歌カルタ	574	英語の退化	1015
一の外族の音	1023	印度式塔圖	572	上田博士のP音考	575	英吉利	1016
一の字と筆字	1024	印度の塔の名	573	打消語	576	榮の音	1017
一頭地	1025	韻字分類の弊	574	萬貫	577	繪文字	1018
一般言語現象	1026	韻鏡外轉	575	烏孫王	578	同向院	1019
一千六百五十字案	1027	韻鏡內轉	576	于填の塔址	579	淮南子	1020
壹の古音	1028	韻鏡次清	577	于闐	580	易の字古形	1021
壹越	1029	韻鏡の鼻音	578	維納	581	易の字義沿革四期	1022
聿の字の歴史	1030	韻鏡の音韻	579	雲南貴州	582	易の字の謬說	1023
聿の三段音變化	1031	陰の音	580	埃及の古代資料	583	易の音義沿革	1024
聿の音系統	1032	ウエード式	581		584	易の音字	1025
聿の方言音	1033		582		585	易の音沿革四期	1026
聿の古音ヲツ	1034		583		586	易の古音タク	1027
育の字の話	1035		584		587	易の古音測定法	1028
印刷雜	1036		585		588	易の象・象	1029

易の象傳	1037	鹽の俗字	493	王引之の之字說	495	音韻發達の最高點	1033
易の方言音	1038	鹽の音比較	494	王珂	496	音韻研究法	1034
易の同音語	1039	鹽と鹹	495	歐洲文學	497	音韻の參考書	1035
易の類義語	1040	鹽水滲	496	押韻法	498	音韻の看破	1036
易の二義	1041	おホツク海	497	押韻の音變化	499	音韻の考	1037
易の三義	1042	お御馳走	498	鴨の字	500	音韻の過渡時代	1038
易音の三段變化	1043	和蘭陀	499	落窪	501	音韻と金文	1039
易に混じ易キ字	1044	荷蘭陀	500	岡本保孝翁	502	音韻の補助學	1040
易はヤ行音	1045	黃の音字	501	小川尙義氏	503	音韻の分裂	1041
易はとかげ	1046	黃土(ロエス)	502	大坂方言	504	音韻の變化	1042
易はカメリオン	1047	王の音の歴史	503	大島正健氏	505	音韻の結論	1043
越の古音	1048	王の音の由來	504	大矢透氏	506	音韻結論	1044
越の音の歴史	1049	王の語源	505	乙の字の古形	507	音沿革	1045
越の音の變化	1050	王の字の古形	506	温州音のP	508	音字表	1046
捐の音	1051	王は外來語	507	誦文(オンモン)	509	音字觀	1047
宴齋國書碑	1052	王と玉	508	音韻學	510	音實	1048
圓の字	1053	王號	509	音韻學建設	511	音聲學の力	1049
焉の歴史	1054	王引之	510	音韻學と記録	512	音聲學と漢字	1050
焉の原義	1055		511	音韻學の貢獻	513	音上の不一致	1051
燕の國の弗	1056		512	音韻研究の動機	514	音系統	1052
炎の系統	1057		513	音韻學規範	515	音結合	1053
鹽の字	1058		514	音韻學の影響	516	普通文字	1054
鹽の方言音	1059		515		517	音調の力	1055

音調の差異	七六四	音の轉換	六六六	讀聲文字	三三九、六四〇
音發達の中心點	八〇八	女の字	九六	海陽	五〇七
音符	七三、八二、三四三	カ	カムイ(熊)	一〇〇〇	三三九、六四〇
音符置換	三四八	カシヤバ	九六	河の外族語	四八三
音符の統計	九三三	觀季子伯	二二四九	河井仙郎氏說	二九二
音符の話	三七八	カシユガル地方	五七九	害の字の古音カツ	九一〇
音變化	一三〇	カシユガル地方	二五三	害の字の古形	九一〇
音法則の要	八二七	カイセル	九九九	害の音とㄨㄛの關係	九三三
音變遷	八〇二	諧聲	二八二	丰の字音變化	九三〇
音不調和	一七六	カウの本音	一〇	丰の字音博士	四四一
音轉換	七五	カサヤの三段變化	二二六	鎌倉時代	五三三
音譯	四六六	河南省彰德出土	二〇八	形以外の注意	一六九
音譯の入聲消滅	一〇八	河南省彰德府	三三	株式字	二四三
音譯假名	六〇	翰墨氣分	二七	形以外の注意	一七六
音譯上の入聲	七二	廣東の天龍	六七	河水の義	四七八
音譯上のㄨ音	六九七	漢族文化	一	各の系統	四三五
音の分量	七四五、二二五	雙の家	九	各の系統字	七三
音の沿革	五二	刀の字	二	各國語の馬	六三
音の音字	一〇三	加藤恒忠翁	二二	格の字の古形	九六八
音の過渡時代	五九二	カセト(文法家)	二〇八	革の字	三九六
音の結合關係	七八三	ガブレンツ	五三、六六六	鶴林玉露	五四五
音の同化	五三九	カブレンツ	七〇	角の音二種	九三三
音の轉化	五三九	カメリオンの分布	一〇三	赫連	五三九
				顎音化	五二九

假と嶽	一三〇	監の系統字	七三	漢文の受持	一三五
學の字解剖	三〇	間歇的現象	一〇七	漢文教授法	二〇
學と教	三〇	干の音字	一〇三	漢學の弊	一一四
學堂	四六六	干藤字書	八六三	漢學の大缺陷	一七一
學術としての支那語學	一五	甘蒲塞	六九三	漢語の感	二七六
學の字	九二	甘察加語	一一一	漢語の軟化	二七六
樂の音字	三〇	看板	三三	漢書	六七六、七三二
樂の系統	四六六	韓語	三三	漢書	五三九、六二八
樂の系統字	七六四	漢字構造	三〇五	漢魏以前のㄨ	六五九
甲胃の音	一〇九六	漢字選定	三〇七	漢洋語	二二六
甲胃の音變化	一〇九七	漢字音の系統	一一三	漢吳音考	七〇
合戰音變化	一〇九八	漢字音の法則	一一六	漢譯地名	八〇
合戰の音	一〇九八	漢字音系統目次	一一三	漢土面積人口	一〇
合併の音	一〇九八	漢字系譜	一一三	漢音吳音	三三
合點の音	一〇九八	漢字調査	一一三	漢と黃	一〇
割の字古形	二二、二二五	漢字要件	二六	顧師古	一〇
東の系統字	七六三	漢字横書	六	健陀羅の塔	九二
簡易文字	一六八	漢字觀察	二九	キケロ	一〇、五三六
簡便說	三九七	漢字說	一〇	ギヤミ語狗	一〇
成カムの類推	一一八	漢字二大作用	二二	キアラヴァン	一一四
成の音字	五八二	漢字趨勢	二二		
監の字	七六六	漢字世論	二二		
監の系統	四一九、四三〇				

キランテイ語	四三三、一三三三	記紀萬葉	六七九	函の音字	五八五
キランテイ族語君長	一〇八三	記録の缺乏	一一五	匈奴	四九
キランテイ族	四三三	氣の音變化	四九五	匈奴語	四九
ギラフエー	一三六	喜馬拉耶	一〇九四	匈奴語大刀	一〇八一
キルギス	一三六	喜の音ヒ又はシ	一〇九四	匈奴語單干	一〇八一
キルギス語	一〇七	貴の語源	一〇九四	匈奴傳	四九
龜の字	二五五	貴州雲南	七二六	京の音字	五八三
龜の語源	二五五	氣息	六八七	京の系統字	七六三
龜甲牛骨	二四六	希臘	五四四	京の假名遣	一一五
龜甲金石	四	希臘語の塔	一〇〇一	教授法の改良	二六九
雲の字	八	歸納法	三五一	教授案	一六八
龜甲斷片	一六	危の語源	五五三	教育家	三〇〇
契丹女眞	一、三三	柁の音	一三三	行政區劃と官語	一一七
鬼の概念	五五二	既の字の古體	九六五	堯典	一〇三
奇の系統	九〇	姫の字の古形	九八八	堯典の價值	一〇三
奇の音字	五八四、一〇三	木村正辭翁	三三三	堯ケウの類推	二二七
寄附の二音	一三三	機械的作用	六五	及キフの音	一一六
騎兵	三〇五	偽物の注意	三三七	及第の音變化	一一〇
其の音字	七六七	義務教育	一〇三九	急の字の本義	五八五
基督の音	一三三	義の字の解	一六三	業の字の本義	九八七
麒麟	一三三	議會の速記	四八〇	夾ケフの類推	一一七
麒麟兒	一三三	魏書	五三六、三九三	協の字	六〇

協の俗體	一八〇	今の音字	一〇三	會の字の古形	九八九
協の清韓音	一八五	今の系統	四一七	會の字原義	一一三
協の字構造	一八六、一八〇	今の音疑問	一〇七	會の音	一一〇
協十同記源	一八三	今の字の古形	九八八	會の音變化	一一七
麴の字	一三三	金石文字學の力	一〇五	會、穢の音變化	七九四
菊の字の篆書	一三〇	金石文	三三三	會意同起源	一九三
菊の安南音	一三〇	禽の字	三三三	會同語板説	一九四
菊の名の起り	一三〇	近代の英語	一一二	繪畫の前身	二〇〇
菊の朝鮮音	一三三	クスターナ	五五一	繪畫の模倣	二〇〇
曲の字	三六八	グリーキ語	五三七、七〇	繪畫の模倣	二〇〇
契丹國志	一〇七	グリム	二九	繪畫の模倣	二〇〇
契丹國	一〇七	グリムの音法則	七七八	繪畫の模倣	二〇〇
橋の音	一三三	グロセリーの音語説	八八八	繪畫の模倣	二〇〇
吉寧馬礁	一〇一	句の字	一〇〇	繪畫の模倣	二〇〇
吉の字	一一	狗の解	二〇〇	繪畫の模倣	二〇〇
吉の字の古形	九八	狗の音比較	二〇〇	繪畫の模倣	二〇〇
吉の諸音	四七五	區の音字	五八五	繪畫の模倣	二〇〇
吉の音發達	四九四	區の系統	四〇〇	繪畫の模倣	二〇〇
吉の音比較	四七五	區の字の歴史	二二	繪畫の模倣	二〇〇
吉力石	四七五	花の字の歴史	二二	繪畫の模倣	二〇〇
吉慈尼	四七五	花と華	二二	繪畫の模倣	二〇〇
白の字音	二〇一	華の支那音	二〇八	繪畫の模倣	二〇〇
白の字	二〇一			繪畫の模倣	二〇〇

活字	三七七	廣東の入聲	七〇九	見の音字	五八四
活字の劃	二六三	結骨	七三三	現代の支那語	二七九
活字の不備	一六六	結繩	九五九	現行漢字	一六三
活版所	三三三	頁の字の沿革	一九六	元始的の音	七四
活の字	三二七	研究法	五二八	元曲	五二七
繡鸞	一七八	研究法案	二二五	元曲、雜劇	八〇七
訓の字	三三	研究法上の支那語	二七三	元朝秘史	四六七
君の音字	四七八	研究法改良	二七〇	阮元	二〇六七
君の音比較	四八六	研究餘地	一〇五〇	支非	二〇六七
君、王、公	四七五	犬の解	一一三三	支非三藏	三六九
君の音の歴史	四八七	權は始也	二〇〇	支非の音譯	六七七
君に關する語	四八八	乾陀羅	四六三	源氏物語	五五一
君王の系統	四八八	憲の字の古形	五九四	源氏物語	五五三
會意文字	九	憲の音變化の表	九一七	源氏物語	一〇五三
觀光園	二九	憲と書との音關係	九三〇	言語學史	一〇五三
官の音字	二九	象の字の歴史	九一七	言語學的觀察	一〇五三
官話の音特質	七九	象の系統	九一七	言語學上の易	一〇五三
館の字	六二	象併の義	七六三	言語學の力	一〇五三
管猛	六三	建築音	四三八	言語上の支那本部	一〇五三
關中の音	六五	健全な古代研究	四四〇	言語上の問題	一〇五三
元興寺萬盤銘	四八八	險の音	四四〇	言語感覺	一〇五三
廣東音と日本	二七〇	險の音變化	六三二	言語本位の研究	一〇五三
	六四		四八六		二七四

言語本位の文字	二七八	コメダイ	五四六、五五一	古文	三三五
言語上の制服	二六二	顧炎武	一〇八	古文の不定	一〇六六
言語異同説	二四六	孤立語	二八九	古器物上の動物	一三三
言語根本關係	二四六	鼓の字の歴史	三三、三九	古銅器	一三三
言語一源論	二四七	鼓の字	一七四	古代英語	五九
言語多源論	二四七	戸の字	九七	古代風俗	一八二
言語研究の眞意	二五六	巳の字	九七	古代ハ行音	六九
言語循環説	二九一	乎と與	九七	古代思想	四四〇
言語發達の最高度	二九〇	古音	一〇五五	古代支那の研究	二四三
言語の心理學的觀察	二九二	古音but	九八	古代支那語と現代語	二八四
言語の同化力	二九五	古音と今音	四六、四六八	古代の武器	九三
言語と人種	二四六	古音と今音	五〇四	古代建築	三三
言語の生命	二四六	古音の佛	三三	古の音字	五八五
言語の音調	三三三	古音の復活	三三	米の字	九八
言語と歴史	一〇五七	古韻の沿革と由來	一〇三	米の字の歴史	一一一
		古歌書	一〇三	小苗はタク	一三三
		古老子	一〇三	五十音の發音	五九
洪憲の年號	二	古記録	四七	五胡十六國	六三
古代文字	九	古記録の取扱	四八	五經文字	六三
ゴシツク語	三三七	古記録の上の易	一〇五	五方面の觀察	八六
ゴシツク字	三三三	古事記	五九、六三	五穀の實り	八六
ゴルト語	二五〇	古事記萬葉	六九	吳の不律	九〇
コルヤーク語	二五一	古樂	六六	吳音	九〇
			六六		三三

紅樓夢	五三七	皇の音變化	四六〇	國技館	二九二	毘の音字	五八五
口の音字	五八三	光の音字	五八六	國家	二九一	齊魯の地方	二八
后の字原義	二〇〇	康王之話	一〇六三	國民思想	二九五	藏龜藏陶	一
鈎逆	四八三	康熙字典	二九三	團字	五九	サキノニ	七三九
高大の義	四四三	看の字	四〇四	哭の字	三九七	サハラ砂漠	七三九
高の音字	五八三	交趾	六三三	酷血	一三三二	莊子	五
高大、自由の語	九六九	交趾支那語	七七〇	黒龍江口	二二〇	サハラ砂漠	七三九
喉音	四〇五	交趾支那	七三三	谷と刻	一三三〇	サモエード語	七三九
喉頭摩擦音	五三七	交の音字	五八三	谷の音字	四〇一	サンスクリット音譯	二五三
阜陶	四二五	交通と音韻關係	七二二	告の音字	五八三	左傳	一〇〇八
洪水傳説	五五	行の音沿革	五三三	兀の音	四六六	差の字	四五一
黃帝解	一〇八六	合の字の構造	九八	忽と滅と同意	八二	差の系統	三九七
黃河の地質	二〇四	合の字の古形	九八	忽の入聲	八二	西遊記	三三九
廣告	五六	合の字の方言音	九八	忽必烈	五四〇	才の字の歴史	二八八
公の系統	四〇〇	合の字の本義	九八	忽必烈汗	七六	最近の日本語	二八八
岡の音字	五八三	合の音變化	四九三	智の字	一〇一	紫の音	二八二
孔子	四八八	合の系統	四二七	昏の字	一八二	妻の字	一八一
孔子教	一七四	合縱の音	九三	婚禮の風習	一八四	妻字解剖	一八一
孔の音比較	四八八	合を答に代用	九三	蟻	五七〇	在の字	一八一
考古學的研究	二四一	甲乙の音	一〇八七	良の音字	五八三	在の字の語	一八一
孝道山石室	二二	甲の音字	五八三	今後の説文音韻家	一〇八六	皿の字の歴史	八二
皇室	四六〇	甲の字の古形	九七一	金毘羅	五八	作の字の古形	九八
		國語の趨勢	二九五				

割の音源	一〇〇五	市の字の語	八二二	詩江漢篇	一〇六九
割の音	一〇〇三	兒童腦力	五〇五	四聲の推移	七四八
割の方言音	一〇〇四	兒童心理	三〇五	四聲の細別	七四九
雜の音	三七五	自の字	三三八	四聲以上の別	七四九
雜駁の音	一〇九六	自然主義	三三九	四聲の九種類	七四九
雜の字	二二七	鼻の字の歴史	三三八	四字の古形	九七一
雜兵の音	一〇八六	事務所	三二六	四字の年號	一〇九
雜、執の變則音	一〇八六	辭の字	五九	史の字の古形	一〇九
皿の字	九	寺の字	三九五	史記と漢書	六九七
參考書	三三〇	寺の音變化	一〇四五	史記匈奴傳	六九七
三段變化	一〇一、四〇二	寺の字の古文	八二五	史記甘茂傳	一〇〇
三重母音	三六七	寺の音の歴史	六二四	史學研究	四六五
三の字の古形	九六八	時の字の原意	九〇三	史學雜誌	五〇九
三種の入聲	七四九	時の字の古形	九〇三	史學の補助	二四三
三種の去聲	七四九	時文と官話比較	七四	子の字の古形	一〇六七
三皇五帝	四四九	時候兒	一〇三三	子の字の原形	一〇六七
三大語鼎立	二八三	詩韻	二八九	子々孫々の古形	八三
三字の年號	二二五	詩小雅	五二	字音の語	九六八
三千五百字説	二六五	詩の大雅	三六八	字音の語	七四
山椒	一三二	詩の國風楚芝	一三五	字音史	六七六
識の字	六三	詩の召南	四〇三	字音研究	三三三
山川と海流	七九六	詩の國風、周南	四二四	字音の研究法	三六四
殘酷の義	四三五	詩三百篇	六八	字音變化	四〇〇
				字音の變動	一〇一一

字音假名使の便法	二二九	支那學	五三	支那音法則の一	七七七	暹羅語	四八、四九五
字音轉換	八五二	支那學の建設	五四	支那音法則の二	七八七	暹羅語と支那語	一三三七
字音の沿革	四八五	支那地名字	五八〇	支那音法則の三	七九〇	暹羅語と支那語の比較	一三三二
字音の分布	四八七	支那主權者と言語	二五八	支那上代の動物	二二三	暹羅語の音韻	一三八一
字音の長短	二二五	支那塞外の言語研究	二五七	支那國言語境界線	二八二	暹羅單語の構造	一三五三
字音法則	二二二	支那歷朝の都の位置	二六〇	支那國言語分布	二八一	暹羅の語彙	一三六一
字音字形	一〇三	支那傳説	三三八	支那年號	二九四	射の字	九七
字形固定性	一〇四	支那帝國内の諸語	二八〇	支那の古代	二九四	謝啓昆	三五四
字形萬能主義	二七一	支那獨特の音	四七	支那の人口	二八〇	舍の字古形	九八
字源	一〇五	支那南方族の語	九〇	支那の外族語	四七	車の字	九八
字源の寶典	二四九	支那南方外民族	七六七	支那は二種語國	二八三	社團法人	一〇一
字典の缺點	二四九	支那沿岸の音比較	七九五	支の音字	四〇三	勺の字	一〇〇
字典の編纂	二八	支那文學の特質	三三三	爾雅釋詁	一〇六	釋の字	六三
字劃者略	一〇〇	支那文字	三三一	爾雅	四三、四六	釋名の考證	九三
字劃の區別	一三三	支那文字學	三三三	重野博士の書翰	三三三	弱の字の解	一〇三
字と音	三三八	支那語の獨特	二九	白鳥博士	五四六	之の音字	六九
滋養の二字	二二	支那語最高度説	二六六	白鳥博士の忽音説	八八、八九	之の音と外國音	六七
支那古代文化	三	支那語最低度説	二六五	汁粉	三三六	之の古音となること	八四
支那の山僧	一	支那語の僻見	二六三	車の字の古形	八二	之の原意	一〇一
支那文字の特異性	一四	支那語の根本	八三	者の音	七七	之の古音タイ	八八
女装した男	一八	支那語本位の研究	二六七	者の音字	六七七	之の字音の變遷	九〇
象形	八	支那語族の狗	二〇〇	者の字の古形	二九一	之の字の古文	九七
神農氏	一〇	支那語觀察二面	二六八	者の系統	四二	之の字古形	九八、九七、一〇三

之と寺の關係	八九五	十七八世紀	四七〇	娶の字	一八一	出の字の古文	一三三
之と特の關係	八九五	十萬の音	一〇九六	種子	四七〇	出の古音トツ	一三三
之の諧聲字三十七	八九八	執權の音變化	一〇九七	舟の字の古形	八二	出の系統	四七
芝の音	一三三	輯の音	九八七	秀の音字	六三八	出の語源	一三三
此の字の解	一〇三八	集合の義の文字	九八	州の字源	二〇二	述、術の音符	一三三
思の字	一〇一	集の字	六二	州と洲	二〇二	述と車との關係	九二
音の説明	一〇二	集韻	六二	充の音字	六〇〇	述の字の古文	一三三
音の入聲音	一〇〇	習字手本	二〇、三三	戎の字	二	句の字	一〇〇
始皇帝	四四	習字	三〇	周代の古文一症	九八	荀子	四三
矢の字	九七、三九	習慣性	三〇	周代入聲	一〇八	荀子君道篇	四三
至の音字	六〇〇	朱の長音	一一七	周代の音韻	一一一	春の字の話	一〇九〇
齒の音	一〇二	朱駿聲	一〇五	周の古音テキ	一〇二	春の字	一一一
齒舌音	九八二	朱駿聲の佐字説	三三、一〇七	周の建國	一〇一	順の音	一一〇
枝の音	一〇二	朱駿聲	九六	周の音字	六三	書の泰誓	一〇六
十の字の構造	九八〇	手の音比較	六〇八	重唇音	四三	書の研究	四三
十の字の本義	九八一	酒の字の形	九七	宿の字	四三	書の研究方面	二八
十の音變化	九八	酒の字	九七	菽の字	三二	書の妙味	二八
十千の音變化	一〇九	酒母	一七一	菽の字の古文	一一八	書の史的體系	二八
十服の音	一〇九	壽の字の古形	一三三	淑女の音	一一二	書物の表題	三三
十一陌	一〇九	壽の音字	九七	熟語	一三〇	書道	二八
十二錫	一〇九	壽福	六三	熟語	一〇九	書紀	二八
十三職	一〇九	樹の字	二二	出の音字	六三	書家	三三
					六三	書は美術也	三三

處の音	1102	上帝	1105	新の音	1119	尋の字	1127
初の字の古形	916	上の古音	1107	新字制定	1129	尋の字の話	1130
初等教育	1033	上の古文	1107	新字割	863	眞の音字	1132
女の長音	1118	上の類語	1107	新音表字	793	津の字の歴史	1137
女の字	1180	上海の入聲	722	新唐書	467, 539	臣の音字	1137
女眞語	1180	上海方言	649	新羅面積と人口	1182	秦策	1072
女子用文字	1176	上海方言	588	新語形	49	秦の字	100
助辭	67	粧の字	318	新の字	396	神話童話	100
小爾雅	1090	妾の異音	1005	新の字の話	82	神代卷	750
小學の末技	860	執着の音	1024	親の字の話	82	神農氏	1137
松の字	1171	執の字の歴史	1026	新聞	327	神童	1137
訟の音	1102	七の音字	1103	新橋須田町間の看板	336	神の音	1137
尙の音字	612, 1102	七補助學	338	清朝	599	信仰	1137
音の字	63	實習と研究	1107	心理作用	382	人類學	1137
賞の字の古形	67	室差傳	1107	心理學	1166	人種と言語	1137
將來の漢字	1177	悉曇	351	心理的現象	42	人種の識別	1137
商店看板	338	質の韻	493	心理學上の支那語	83	人名と地名	1137
燒の音	1102	失の系統	407	心理學と音韻	105	人名の特別讀	1137
鐘鼎古文	1067	失の音字	637	唇の字	86	人の原音	1137
鐘鼎金石文	1133	失の音字	1105	晉の字の古形	968	人の音比較	1137
鐘鼎文一例	1135	蜀の音字	637	晉語	461	人の音形式	1137
上代の研究	1135	蜀の系統	637	身度	467	人物畫と文字	1137

壬の字の古形

スギ	1131	瑞典語大	1105	生の字の歴史	1187	伍の字	1137
スツバの變遷	1001	仙頭のP音	635	西廂記	537	説文	1137
スメル	1	寸の音字	630	西の字原義	198	説文の文字	1137
スラーブの音	497	税の字	18	西人の支那語觀	1187	説文の價值	1137
スラヴ語の塔	1001	石刻古銅器	4	西人の著述	1140	説文の研究法	1031
スラヴ語	1101	断端と蛇	19	西儒耳目資	357	説文の誤讀	1031
西班牙	1102	セネカ時代の文具	93	西夏文字	354	説文の不備	1031
西班牙語	1102	セミティック語	1155	西洋文字	83	説文の増訂	1031
審司	77	セレス、セリカ、	536	星の字	70	説文の中の不條理	1031
芻音	323	是の音字	639	星の音比較	98	説文學者	1031
數詞十の方言音	635	世界人口の四分一	1185	齊田氏	607	説文音韻學者	1031
樵人氏	911	正字と誤字の別	1109	齊の字の歴史	626	説文の音韻研究	1031
隋字	414	正劃の字	863	浙江音	1155	説文總字數	1031
隋の音變化	61	政府の力	317, 319	斥の音字	651, 688	舌根音	1031
隋書と唐書	487	成の字	300	責の字	639	切斷の義	1031
推古朝の古音	697	成の字の古形	396	責の字の古形	808	專門	1031
水滸傳	1170	清濁の法則	97	續の字の古形	1079	千の音	1031
水滸塔圖	677, 1066	制眼者の屈服	838	契の音	1079	迂の字	1031
水流の字	538, 617	生の字と萌芽	261	石索	414	山海經	1031
	999	生蕃	267	石の音字	1079	占の音字	1031
	476		694	石鼓文	639	占セムの類推	1031



金の字の古形	九八	且生白字説	二四二	俗字と正字	八三三	タイ語	一三五
川の音字	四〇三	祖の字の古形	九七四	俗字表	二二八	タイ音系統字	六三八
川の古音	四七	蕎麥	二七〇	俗劃	三三三	道經の道藏	五
前印度	二二	蕎麥屋	三二七	俗音一例	三〇五	大陸情趣	七
前漢書	三六	所以	二八五	俗體字	八六三	タクの音の言葉	一〇八一
前漢書	六九	倉頡と結繩	九五九	俗態	五	ダーウケン進化論	一四七
禪宗	五五七	倉頡説	二五一	足の音比較	六〇五	辰の字	一
單子	五〇	神冠と竹冠	九八	促音の現台	二〇一	ダラー(弗)の字	七四
戰爭の文字	二五九	桑港	五八	促音ツの字雜	七〇	タ行音の系統字	一一一
然は焉也	一〇元	宋音	五三三	速の音比較	七二	タ行音規則	一一三
然の語源	二〇〇	宋末元初	一一三	則の字の解	五〇八	多説語	五二九
泉州漳州音	四六八	宗ソウの類推	二二二	則の字の解	一〇八	多數觀念の漢字	一八七
全韻玉篇	四七〇	總督府	一〇四九	粟特	六二九	多の音變化	一〇六
錢の字	一七五	争闘の姿勢	二六八	卒業論文	五二	多の音字	一〇六
		奏の字	一〇〇	象堵婆	九八九	多の系統	四〇
		曾ソウの類推	一三三	村の字解	二〇四	陀の音	六三三、一一四
則天武后	五	象の假借	一三三	孫堅	四二	高田忠周氏	一〇八
租の字	一八	象の字の古形	一〇六	孫權	四四	高田忠周氏調査	一〇六
ソロン語	二五〇	象の模倣	一三三	尊の古音	六三	賽の系統	四〇八
蘇我氏	五九〇	俗字	一三三			賽の音	四九四
蘇我	二七〇	俗字と正字の別	八六三			賽の音	一五九
楚の字	二七〇					賽の音	四九四
鼠の字	九六					賽の音	四九四

泰の字	三三、一〇〇	單母音	五一一	置漢漢	八九三	差不多	六四九
待の字の音解	一〇三	單獨の原字	四八〇	地名傳説	七七一	指文	一六五、三三四
待と特の音關係	九〇一	且の音字	九七三	地名音譯	一〇六	中世英語犬	一〇六
帶氣音	五三七	且と農	一一〇五	地質時代	一三三	中立母音	四八〇
兌の系統	四一〇	瓊越	二二	地理地質の研究	一三二	中古文典	三三
妥協	一〇一	段玉裁	五六	地理上の観察	六四九	中央亞細亞	三六八
太の字沿革	一九九	男の字	四七四	地理上の比較	五三	中山傳信錄	五五九
太陽中心	六三三	男の字解剖	一〇一	地理上の入聲	一六六	中庸	八六一
大南國史演歌	八六一	男の字の歴史	一一九六	地理上の觀察	四八七	中等教育	一〇六
大雅文王篇	一〇三	男の語源	二九六	地平線	七三	蟲類の話	二〇〇
大雅蕩篇	一〇七	ち		地圖	七〇	蟲の古音	四九
大唐西域記	五五一			血の字の歴史	三二	吊の字	六一
大勝利	三〇一			西藏語	二五八	調査の設備	一一八
大金國志	四六八	指文	三三	西藏語君長	三三	鳥の字古形	一七九
托福	七三八	血の字	九	西藏語系	八三〇	鳥鏡	五三九
濁音	六二八	チヤリウス皇帝	二五八	西藏語	六八四	鳥の字古形	九六五
達意文	一三	チャガタイ語	二四九	西藏語系	二八	重の音字	六三七、一一四
達摩	八七	チャルマース	三三	西藏語系	二五	長母音の假名遣	一一三
端方	三三	チュクチー語	二二	西藏語系	二五	長鼻牙	一三三
擔の字	一七四	チュラニアン語族	二七	西藏語系	二五	張成孫	一四七
單の音字	六四〇	チエヒ語	八二七	西藏語系	二五	兆の音字	一〇七
單の音變化	四八七	チヨースー時代	五九	西藏語系	二五	聽の字	六三七
單語の増殖	二七	耻の字	六二	西藏式塔圖	一〇〇	聽の字の誤	一〇九



塔の字の初見	九七七	虎の字	二七、二八	日本語系	一一、一〇
塔の音譯法	一〇〇一	寅の字	二六	日本語ガ行音	七、二二
塔の方言音	九七九	寅歳の寅の字	二六	日本語	三、七
塔は外来語	九八四	屯の音字	六三九	日本語田と厦門	六、二二
塔名傳來の徑路	九八六	敦の字の古形	九八八	日本語田と安南	六、二〇
塔名傳來三疑問	九八七	な	二八六	日本語古事記の位置	一一、一
塔名の支那傳來	九八八	ナガ語	一、二、三	日本語支那安南	一一、一
塔婆	九八八	奈良朝	六八〇	日音比較	七、二二
塔婆の沿革	九八八	奈良朝以前	五、三	日臺大辭典	六、三三、六、三四
塔と塔婆の音差	九八八	内務省	三、四	日露戰爭記	四、九一
徳女	一、二、三	苗木の名	一、二、三	日精事件	一一、四
特の字の石鼓文	八八五	中村不折氏の説	二、三	入聲の音質	七、二二
特の字の篆書	一、二、三	納豆の音	二、六	入聲と去聲	七、二〇
特音音通	一〇八〇	納豆音變化	一〇、九	入聲と上聲	七、一八
讀書音	五〇五	南清音	三、七	入聲と今の四聲統計	七、一八
讀書音と俗音	六六六	南京	五、七	入聲の消滅	七、一七
讀本編纂	二六四、三〇四	南海寄歸傳	六、三	入聲の有無	七、一七
獨逸語	四一七	南方族	七、三	波倫語	七、一七
獨逸語と英語	五三六	南越大獸	一、三三	馬	一〇、一
獨占研究	一一四〇	南齊書	五、九	佩騰	六、三
獨逸のグリム	一一八八	軟口蓋音	四、八	巴利語のツーパー	一〇、一
唯の字	一一八			破裂唇音	六、二〇

入聲中の三區別	七四九	寧波	六、七	巴利語のツーパー	一〇、一
入聲音考	七〇五	人形	四、二	破裂唇音	六、二〇
入聲音分布圖	七二一	子丑寅卯	三	破裂音	九、八
入聲音の語尾形式	七三二	ネパール語	四、五、一、五、三	波倫語	七、一七
入聲音の統計	七三二	ネパール語狗	一、二〇	馬	一〇、一
入聲消滅の傾向	七三三	倭の字	三、四	佩騰	六、三
入聲消滅の法則	七三三	熱と日	一、三三	貝の字	九、七
入聲消滅後の状態	七三三	熱帶動物	一、三三	貝の字の古形	九、七
入聲消滅の統計	七三三	熱と日	一、三三	賈の字の歴史	三、七
入聲消滅の順序	七三三	年の字の歴史	一、三三	白の系統	三、九
入聲三種	七三三	年の字の古形	一、三三	白虎通	四、七
入聲分布	七三三	年號の始	一、三三	伯の字の古形	四、七
入聲重複の音譯	七三三	年號の考	一、三三	別なる語の分裂	九、七
入聲相互轉換	七三三	年號と動物	一、三三	電の音	一、三三
入聲の轉用	七三三	稔の字解	一、三三	英の字	一〇、一
入聲の同化	七三三	の	七、九、一、二、一〇	客の字の歴史	四、八
入聲の音變化	七三三	ノルウエイ	一〇、一六	客の字の歴史	四、八
入道の音	一〇九六	能の字の歴史	二、六	客の字の歴史	四、八
肉月	五五	農の字の歴史	七、三	客の字の歴史	四、八
肉豆	一一二	宣長翁	七、三	客の字の歴史	四、八
		宣長と白石	六、九	客の字の歴史	四、八

八の音分布	六九五	ヒルト氏	五三三、一〇四三	表裏偏	二九二	閩越の古音	七九三
八の方音音	九四七	ヒルトとヒール	一一九	苗族語	七三三	閩察	一〇四
八と贊の音	九二九	ヒンドクース	五四七	苗族語	七九	濱の字	六三
八と百の兩語比較	七三二	卑懶呼	五三九	苗變	一〇四六	品の音ピンとリン	九三三
八庚の韻	九〇	碑文	三二六	筆の原義	九三		
友の系統	九〇	否の字	四九	筆の音比較	六四		
斑點模様	九〇	否定語比較	四三	筆の古音 Pit	九二		
班固	四七、一〇六一	被制服者の勝利	一一一	筆の古音假定	九三		
反切	三六八、八〇一	非諧聲文字	八二	筆の古音三種	九四		
反切	三六八、三八四	比丘那	三六九	筆の字の由來	九五		
般若の音	七六七	比較言語學	五三七	筆の字の篆書	九六		
盤涉	四八三	枇杷	一三八	筆の字の古體各種	九五		
萬歲	三〇四	廣池千九郎氏	六七	筆の字の解剖	九六		
萬里長城	二八二	羊に關する文字	一八四	筆の元始的音	九八		
變の字	六	東土耳其斯坦語	一〇四	筆と利刀	九六		
		尾韻	六四	筆は會意と諧聲	九二		
		眉の字の古形	八二	筆律の音關係	九二		
ヒマラーヤ方面の古音	七二	眉の字	九七	筆紙墨の研究	九二		
ヒブライ	一一三	標準語	四八	必と分との音關係	九二		
ヒマラーヤ	五四	標準字典	二九	必の字の古形	九二		
ビルマ語	五四	表音文字	三〇	必質の安南音	九三		
ビルマ語	七六	表音文字	三六	百姓讀み	九四		
ビルマ語	四三	表の字	九六	緬甸語	九八		
浮屠	六三						

不の古音	四四九	武帝	四四三	文學	五二四	北平官話	九〇、一〇七、一〇八
不成	五三七	武器と筆	六三	文學と文字	三三	北平官話	六四、六六、六八、七〇
不律の論	四四〇	武器の象形	九二	文獻上の古音	七九	北平官話	五八、七八
不明の世音	四八	武器と田畑	二九三	文獻上の易	一〇二	嶺の字の語	一〇二
不同化の音	七二	武陵祠	二五	文獻の整理	一〇五	丙の語源	一〇一
布美天と筆	九二〇	福の字	二二	文章語と口語體	一八	乘の字の歴史	一〇一
父の音分布比較	九七	福州の入聲	七二	文化史上と塔	九六	擲の方音音	一〇三
婦の字	一七	福の字	二二	文化の進める漢族語	九六	扁の系統	九七
婦の字の古形	一〇六	副使	二二	文相の語間	九六	扁旁冠脚	九七
婦の字合體	一〇六	腹の字	二二	文王皇矣篇	九六	變化七百入聲	九七
婦人語	一〇六	複の字	二二	〜	九六	變化七百入聲	九七
籌草	一〇六	複合語中の古音	二二	〜	九六	變化七百入聲	九七
富の字音	三三	弗の音比較	四	マールینگダ海	七三	變易說	一〇二
富士見軒	三三	佛の音比較	六	ヘルムホルツ	三三	變化と易	一〇二
府の字の古形	一一一	佛の清濁音	八	ペン書き	二八	變色辨易	一〇二
府の字分解	一一一	佛の清濁音	六	マンガル語	四三	變色辨易	一〇二
府の字義變遷	一一一	佛典音譯	六	マンガル語、君長	一〇四	變色辨易	一〇二
府の語源	一一一	佛典音譯	六	マンガル語、君長	一〇四	變色辨易	一〇二
府は豐の意	一一二	佛陀	一〇	マンガル語狗	一〇三	變色辨易	一〇二
府は福也	一一二	佛人ジュリアン	六	ペンキ屋	三三	變色辨易	一〇二
舟の字の歴史	三三	佛蘭西音	五	北平音	三三	變色辨易	一〇二
藤岡助教	三三	物理上の音響	一〇	北平音と安南音	三三	變色辨易	一〇二
	三三	分布地圖	七	北平音の統計	六	變色辨易	一〇二
						變色辨易	一〇二
						變色辨易	一〇二
						變色辨易	一〇二
						變色辨易	一〇二
						變色辨易	一〇二
						變色辨易	一〇二
						變色辨易	一〇二

補助學の命名	二二九	期の音字	二二三	北燕朝鮮之間	一〇〇〇	摩察音	六三三
暮の字	五八	亡バウの類推	二二五	種の子の歴史	二二六	馬の音	六〇〇
菘菘草	二三八	芒	一〇〇〇	没の字	三三二	馬の音比較	六九三
寶の字	六〇	望の字の古形	九六五	梵漢音譯	六三三	馬の分布	六九三
包の音字	一一三	葦容氏	三九	梵字	九六	枕の草紙	五三三
包の古音	一一五	奉の字	三九六	梵語	五九三、六七〇	松村博士	一一三
包圍研究	一一四	奉の字	一〇〇	梵語狗	一〇〇四	曲げ	一一八
峰ホウの類推	一一三	奉天南塔	一〇〇〇	梵語の塔	九九五	埋葬地	三二六
邦の字解	一三〇四	法の音分布	六六五	梵語音譯	六七〇	每句韻	一〇七三
母の字の古形	一〇九	法則十一則	八三一	梵摩の音	六三六	騫地	六二七
母音三角形	四三	法度の音	一〇九	梵文學	七六六	鞣鞣	四三三
母音變化	四二	法顯傳	五六六	梵文學	一一九	滿洲	六六七
母音一の由來	六四	冒の音	一〇三	魏譯時代	五七四	滿洲語	九四九
母音の推移	九四八	冒の字	一一九	魏の字	一七四	滿洲語系新説	一一〇
母音の變化	四九五	冒頓	六九六	魏の字	一七四	滿洲面積人口	一一八
母音の差	九〇五	冒頓單干	八六	マージェラス	一一八	滿洲の洲	二〇八
母音の程度の差	六三三	冒の古音	八六	マジヤール語	一一九	滿洲飾	三三
母音Vの沿革	六三一	帽の字	三三	マジヤール語狗	一一九	萬の字	二五九
母音轉換の法則	八五三	北史	五三九、六九七	マホメッドの讀方	一三〇四	萬の字の歴史	一〇一
方の尾韻	一一三	北涼の碑	三三	マレイ語	八二六	萬葉	五九一、五五八
方の系統	一一三	北狄語の軟化音	九二五	マンモス	五〇四	萬葉集	五〇
方言音字音	七五	北方民族の音影響	九二四	マ行音	六九二		六三三
鳳凰	二九七	北方民族	四五〇				

實の字	一八	モルドヴィン語	二二四九	文字學の資料	二四五	文字の描寫期	一〇
道の字	一一	本居宣長	七三三、五〇五	文字學の要求	二二八	文部省	二九一、三三三
已歳の巳の字	二二	孟子告子篇	一〇八〇	文字學の各方面	三六六		
ミルとミール	一一九	蒙古	四六七	文字研究の諸方面	二四六	ヤクトト語	一一九
三越美服店	三三九	蒙古	四六八	文字總數	二四七	ヤプタルの音譯	七〇〇
南支那人の體質	八二四	蒙古語	三七〇、四九	文字關係	六六	也の音字	六三七
實れる禾の字	一一七	蒙古語狗	一〇四	文字増殖	四一	也の系統	四〇
蜜柑	一一八	蒙古音	四六三	文字發展の運命	一一九	耶の字	一七
明朝活字	三三四	蒙古面積人口	一一一	文字要素	八五九	邪馬臺	五九六、六九
明清の交	四六八	木豆	一一二	文字構造	一一一	野生の麒麟	一三七
無聲音の説明	一一〇	物の字	一〇一	文字製作時代	三三	山路愛山氏評	九二六
		物の音の歴史	八八	文字の參考書	六七五	山下寅次氏	六三六、五三
		物の音變化	七六五、八八	文字の問題	二三五	藥の音	一一〇
		物の音二種	八八七	文字の補助學	三三七	有聲音	一〇〇
		勿音放	四三三	文字正俗表	八三	ユカギール語	一一一
		目の字	一七一	文字正誤の論	八六	由の音字	六三六
		目の字の古形	八二四	文字と植物	一一三	由の系統	四一〇
		門の字	九七	文字行脚	一五	有史以前の古音	七五
		門と戸	三三六	文字學研究の母體	二四	有史以前の古音	七五
		文字學	二四七、三三	文字自體の研究	二	勇の字	六二、三二九、三九
		文字學者	四八六	文字の幽玄	七		

猶大人	二五三	陽様の韻	四六四	藍市城	五〇〇	略字説	三二九
熊岳城外塔	九八九	楊帝	四四三	藍毗尼園	六七七	六朝時代の俗字	八六〇
よ		用の系統	四一一			六朝時代のマ	六七一
余の音字	六三八	姚文田	一〇四九	龍の字	一九九	力の字の歴史	二二九
四段變化	四〇三	七の音沿革	六一九	劉鐵雲	一	力、手、爪三字の關係	二二九
與の音字	四〇一	ら		劉鐵雲	二〇	立食の宴	二七三
與の字の原形	四〇五	ライの音	四三七	鑄蟲之長	二〇	律の語源	九四五
與と牙の音	四〇六	ラオス語	四四五	リヒトホーフエン説	四〇四	律の意義	九五一
横穴	一一〇	ラクーベリ	四八一	琉球語	一〇三	律の朝鮮音	三三〇
讀誤り	九三	羅振玉	一	琉球臺灣	一〇三	栗の字の歴史	三三〇
拗音	一一六	老子	五	劉郁の西使記	二二六	厘の字	三三〇
天エウの類推	一一八	ラティン語の塔	一〇三	流音	一〇一	命の字の古形	九八八
羊の音	一一〇	ラブランドの語	二二九	旅館	五二二	林の音疑問	一〇三八
羊の音變化	一〇八	來の字の古形	九七	呂の系統	五二二	る	
羊ヤウの類推	一〇六	來の字の音	九二	遼史	五二〇、七四二	ルンビニー	六七七
洋服	七九	雷の字の古形	一一八	遼史拾遺	三三〇	類推形	一三三
揚雄の方言	一〇〇	雷の字の音	一一八	樂の字	三三	類推作用	四六、五〇六
陽の語源	六二	洛陽	四三、一一三	龍の字	三三	類推上の假名使	一一九
陽の音比較	六〇	洛陽の音	四八、七〇	龍と龜	一一八	類似聯想	四八
陽の音系統	六三	雜の字の古形	九七	龍と馬	一八七	れ	
陽の安南音	五七	亂の字	五九、一七四	龍の安南音	四九、六八	レブチャ語	一一三

録書	三二七	羅馬字修飾	三三	D			
禮記	一七三	羅馬字の前途	二七三	D音攷	六四八		
歴代辭典	四八三	羅馬字の前身	二七六	D音の歴史	六三三		
歴史學の力	六五	羅馬字の各國語	四三	F			
歴史上の參考書	一〇五	ロットナー	一一〇	FとH音分布	六三		
歴史上の入聲音	五三	ロセッタ石文	三三	Fu音對Fuk	一三三		
歴史上の觀察	七九	羅馬字派	一一	G			
歴史以前の交通	一一七	路の字解	一〇一	G音の歴史	五三		
歴史上の沿革	一一六	路の古音	一〇三	G音攷	五八七		
歴史と言語	一〇九	露西亞音	四二	G、Wの關係	四六		
歴史と音韻	一〇二	露伴の賴朝	一〇	G、Hの轉換	二〇		
裂の方言音	九四	呂氏春秋	一〇一	H			
歴朝の音譯	五八	老の系統	四八	Hの音譯	五〇		
ろ		老子	一〇	H音の注意點	六七八		
		老莊派	一〇	H、S	五三三、五三四		
		老上單子	一〇	H、W、Y	五三三		
羅馬字	四八	六字の年號	一七	J	二二		
羅馬字のため	二七	六の字の古形	二九	JとYのたゞ	二二		
羅馬字論	三〇	鹿の字	二				
羅馬字文	三三	論語	六				
羅馬字採用	三六	論語の助辭	一〇				
羅馬字研究	三七	論語意問	一〇				
羅馬字代のペン	三九	論文目次	一〇				

K		K.S.Yの法則 K-S-Y變化表		六三三	P		PWの音		六三二
ㄐ音收	五三六	K.T兩立	五三八	P音收	六六〇	R		六三二	
ㄐ音の歴史	五三六	K.Tの法則	五三八	P音轉換	六六〇	R對KTHMの法則		八三一	
ㄐ音變化統計數	五三六	K.Tの轉換	五三九	P音の變化	七三三	RSの法則		八三六	
ㄐ音の變化各種	七七一	K.T.P	五三三	P音の階聲字	六六二	T			
ㄐ音と母音三角形	五八〇	Kungの音	四六一	P音變化七種	六六二	T音收	六〇一		
K字音系統	五八二	K.Wの變化	四〇九	P音變化三段	六六二	T音の歴史	六一一		
K入聲の過多	七一九	K-Yの變化	四〇三	P音の分布	六六二	T音の變化各種	七二二		
K入聲と四聲統計	五七六	K-Yの變化	五三二、五三三、五三九	P音と母音三角形	六六二	T變化の二方面	六一一		
Kの綴音	五七六	K-Yの變化	四〇三	P入聲と四聲統計	七四九	T→C	六〇三、六三一		
Kと母音	五七六	L-W.K	四〇三	Parisの讀方	一〇四二	T→C-S-Y變化	六〇三		
K-C	五七六	L-Nの轉換	四〇三	P-Fの分布	六〇二	T.C.S.Y法則	六〇二		
K.Gの比較表	五七六	L-Nの轉換	四〇三	P-Hの分布	六〇二	TLの轉換	六〇二		
K-H	五七六	L-Sの轉換	四〇三	P-Tの關係	六〇二	T.S.Yの法則	六〇二		
K-H-S	五七六	L-Y.Sとなる	四〇三	P-B.Sの關係	六〇二	T-Y	六〇二		
Klam	五七六	M	四〇三	P.B.Sの關係	六〇二	T-S-T音	六〇二		
K.Lの轉換	五七六	M.B.Sの關係	四〇三	PLの關係	六〇二	T.Sの綴音	六〇二		
K.Lの對立	五七六	M.Sの法則	四〇三	P.L.Sの轉換	六〇二	Turban	六〇二		
K.Mの法則	五七六	M-Wの關係	四〇三	P-P-F	六〇二	T.Sの變化	六〇二		
K.P.L.S音の共存	五七六		四〇三	P→P→F	六〇二	T.Yの變化	六〇二		
K-S	五七六		四〇三		六〇二				
K.S.C.Y法則	五七六		四〇三		六〇二				

暹羅單語索引

ㄐ入聲と四聲統計	七四七	朝	一六八	黄金爪	一〇四九
ㄐ綴音統計	六四四	温か	一三四	踊り	一〇五一
ㄐの安南音	六〇三	暑さ	一三四	落る	一〇五二
ㄐの變化三段	六三六	味ふ	一三三	落る日	一〇五三
ㄐの變化四段	六三六	誤る	一三三	折れる	一〇五三
Tai音の沿革	六三六	泡	一三三	牡	一〇五三
Tepの音の語	六三六	安南	一三三	小川	一〇五三
Tai音の沿革	六三六	安南語	一三三	女芝居	一〇五三
ㄐと母音三角形	六三六		一三三	音色	一〇五三
				か	
あ		胃	一三八	王宮	一〇五三
アクビ	一三九	稻	一三八		
亞鉛	一三七	池	一三八		
暎	一三八	一	一三八		
青	一三八	犬	一三八		
雨	一三八	犬の子	一三八		
蟻	一三八	家	一三八		
汗	一三八	衣服	一三八		
				い	
				印度の影響	一六八
				咽喉	一三四
				膺	一六八
				歌	一三三
				海	一三三
				梅	一三三
				牛	一三三
				馬	一三三
				魚	一三三
				兔	一三三
				乳母	一三三
				打つ	一三三
				歌ふ	一三三
				生れる	一三三
				雨季	一三三
				打消の助辭	一三三
				可笑	一三三
				黄金	一三三
				肩	一三三
				頭	一三三
				咳	一三三
				刀	一三三
				皮	一三三
				粥	一三三
				風	一三三
				鷺	一三三
				鳥	一三三
				顔	一三三
				貝	一三三

龍	蚊	顎	徽	家鴨	鴨	神鳴り	南瓜	下方	牙	岬	香	薑	川	茅	合	合	書く	鹹	甘藷	寒	乾孕	間
一三三	一三五	一三七	一三八	一四四	一四五	一五六	一五七	一五八	一五九	一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二
岩石																						
一七一																						
口	嘴	頸	臭い	臭い	熊	唇	雲	車	草	畫像	果物	栗	貨幣									
一六六	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇	一八一	一八二	一八三	一八四	一八五	一八六	一八七	一八八	一八九	一九〇	一九一	一九二	一九三	一九四
欠伸	元始の音	言語研究	縣	限定語	限定語例																	
一五九	一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇	一八一
喉	皓	鼻族	氷	氷	香	乞人	古朝鮮	五	戸	苦	子波	小馬	米	米								
一八二	一八三	一八四	一八五	一八六	一八七	一八八	一八九	一九〇	一九一	一九二	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八	一九九	二〇〇	二〇一	二〇二	二〇三	二〇四

骨	蝙蝠	黒色	語分解	語序	今年	今朝	金剛石															
一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三	一四四	一四五															
シビレ	シヤクリ聲	四季	支那錢	支那系統語	獅子	鹿	雌大	枝	島	市場	芝居	姉妹	詩經	寺院	耳	兒	兒童	自轉車	爾雅	死ぬ	寫聲語	
一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三	一四四	一四五	一四六	一四七	一四八	一四九	一五〇	一五一	一五二	一五三	一五四	一五五	一五六	一五七	
州	主人	種々	獸	首府	酒醉	小錢	沼澤	上方	象形文字	庄屋	正午	住家	少女	書經	温	食す	墓ふ	柘榴	七	室	十	十一
一三〇	一三一	一三二	一三三	一三四	一三五	一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三	一四四	一四五	一四六	一四七	一四八	一四九	一五〇	一五一	一五二
十萬	直鎗	身體	塵埃	人力車	人造氷	巡查	暹羅語	暹羅方言	暹羅支那兩語比較	巢	砂	雀	雀の鳴聲	西瓜	水牛	堅氷	相撲	涼し				
一三〇	一三一	一三二	一三三	一三四	一三五	一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三	一四四	一四五	一四六	一四七	一四八	一四九	一五〇	一五一	一五二
せ																						



セルゲイア語	一二八三	多言者	一二七七	父	一二四二	テコール	一二八〇
星尾	一二八四	多數人	一二九	地方	一二三三	手足	一二七八
石油	一二八六	睡液	一二八八	地震	一二六六	手指	一二七八
石橋	一二八一	體	一二八八	知事	一二三三	手紙	一二四〇
赤色	一二八〇	怠惰者	一二七七	乳	一二六六	鐵	一二六七
説文	一二八〇	竹	一二七〇	西蔵語	一二三三	天	一二六三
船	一二八二	籐子	一二七〇	血	一二三三	臂	一二六三
錢名	一二八〇	太陽	一二七五	朝鮮語	一二三三	電線	一二九〇
千	一二八〇	大なる	一二七五	長上	一二三三	ドラビダ語	一二八八
先生	一二八三	大工	一二七五	蝶	一二三三	土地	一二八〇
算盤	一二六〇	大川	一二六一	蟲	一二三三	豚	一二六四
曾孫	一二七六	大根	一二六一	月	一二三三	鳥	一二六四
壯士役者	一二七六	第一	一二六一	爪	一二三三	鳥籠	一二七三
象	一二七三	第二	一二六一	土	一二三三	鳥果	一二七三
象牙	一二七三	只今	一二六一	角	一二三三	鳥の鳴聲	一二七三
象狩	一二七六	單綴語	一二六一	雷	一二三三	蜥蜴	一二七三
タイ語	一二八〇	單語表	一二六一	て	一二三三	蜥蜴子	一二七三
田	一二八〇	段落	一二六一	つ	一二三三	高	一二六八
	一二八〇	チカル	一二六一		一二三三	時	一二六八
						時計	一二六八

泥	一二八一	頭	一二七二	農夫	一二七二	八	一二六六
吃る	一二七二	二	一二七二	は	一二七二	晩	一二六六
玉蜀黍	一二七二	二措	一二七二		一二七二	盤谷	一二六六
盗入	一二七三	二重子音	一二六五		一二七二	ひ	一二六六
刀	一二七三	西	一二六五		一二七二		一二六六
毒	一二七三	鶏	一二六五		一二七二		一二六六
童	一二七三	煮る	一二六五		一二七二		一二六六
動作	一二七三	入聲音三種	一二六五		一二七二		一二六六
道路	一二七三	日中	一二六一		一二七二		一二六六
銅の語解剖	一二七三	日本語	一二六一		一二七二		一二六六
銅	一二七三	日本語	一二六一		一二七二		一二六六
塔	一二七三	日本語	一二六一		一二七二		一二六六
		尿	一二六一		一二七二		一二六六
		な	一二六一		一二七二		一二六六
		涙	一二六一		一二七二		一二六六
		無し	一二六一		一二七二		一二六六
		嘗める	一二六一		一二七二		一二六六
		鳴る	一二六一		一二七二		一二六六
		鳴く	一二六一		一二七二		一二六六
		繩	一二六一		一二七二		一二六六
		鉛	一二六一		一二七二		一二六六
		の	一二六一		一二七二		一二六六
		ネパール語	一二六一		一二七二		一二六六
		猫	一二六一		一二七二		一二六六
		鼠	一二六一		一二七二		一二六六
		根	一二六一		一二七二		一二六六
		眠る	一二六一		一二七二		一二六六
		願ふ	一二六一		一二七二		一二六六
		に	一二六一		一二七二		一二六六
		に	一二六一		一二七二		一二六六
		農夫	一二七二		一二七二		一二六六
		葉	一二七二		一二七二		一二六六
		花	一二七二		一二七二		一二六六
		蓮	一二七二		一二七二		一二六六
		母	一二七二		一二七二		一二六六
		鳩	一二七二		一二七二		一二六六
		演	一二七二		一二七二		一二六六
		腹	一二七二		一二七二		一二六六
		鼻	一二七二		一二七二		一二六六
		鼻汁	一二七二		一二七二		一二六六
		齒	一二七二		一二七二		一二六六
		島	一二七二		一二七二		一二六六
		話	一二七二		一二七二		一二六六
		橋	一二七二		一二七二		一二六六
		破壊する	一二七二		一二七二		一二六六
		梯	一二七二		一二七二		一二六六
		春夏秋冬	一二七二		一二七二		一二六六
		馬鈴薯	一二七二		一二七二		一二六六
		馬車	一二七二		一二七二		一二六六
		漢	一二七二		一二七二		一二六六
		白色	一二七二		一二七二		一二六六
		は	一二七二		一二七二		一二六六
		盤谷	一二七二		一二七二		一二六六
		晚	一二七二		一二七二		一二六六
		八	一二七二		一二七二		一二六六
		皮	一二七二		一二七二		一二六六
		髻	一二七二		一二七二		一二六六
		雞	一二七二		一二七二		一二六六
		美味	一二七二		一二七二		一二六六
		鼻的語尾音	一二七二		一二七二		一二六六
		悲鳴	一二七二		一二七二		一二六六
		獨り	一二七二		一二七二		一二六六
		非常に	一二七二		一二七二		一二六六
		東	一二七二		一二七二		一二六六
		日	一二七二		一二七二		一二六六
		否定助辭	一二七二		一二七二		一二六六
		書	一二七二		一二七二		一二六六
		引張る	一二七二		一二七二		一二六六
		引返す	一二七二		一二七二		一二六六
		比較研究	一二七二		一二七二		一二六六
		羊	一二七二		一二七二		一二六六
		尾星	一二七二		一二七二		一二六六
		牝	一二七二		一二七二		一二六六

豹	表音字	病氣	夫婦	房	船	父	袋	鼻	龍	風土觀察	葡萄	寝合語	佛僧	文章語	蛇	瓜	
一三六五	一三六一	一三六九	一三六六	一三六八	一三六九	一三七〇	一三七〇	一三七〇	一三七〇	一三七〇	一三七〇	一三七〇	一三七〇	一三七〇	一三七〇	一三七〇	
驚	ほ	星	益	方言	方角の名	坊主	寶石	芽	梵語系統語	豆	孫	枕	馬來ホリネシア系統語	万	満洲語	見る	
一三六五	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九
南	水	岬	嶺	峰	明日	蒸す	娘	無	麥	胸	村役所	紫	梅一ナム	目	命令文	滅没	
一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九
森	蒙古	毛髪	目的	桃色	盲人	望川	門	屋根	屋敷	野菜	野菜の長	役者	夜間	夜半	やもり	養ふ	
一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九
も																	
一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九

行く	指	夢	雪	會長	夕方	雄犬	善き	養子	樂	雷	雷光	理解	涼	了解	流星	鱗	
一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	
る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	
一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	一三六三	
南	水	岬	嶺	峰	明日	蒸す	娘	無	麥	胸	村役所	紫	梅一ナム	目	命令文	滅没	
一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九
も																	
一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九	一三六九

129

昭和十年一月二十日印刷  
昭和十年二月一日發行

文字の研究

定價金八圓五拾錢

不許複製



著者

後藤朝太郎

發行者

關隆治

印刷者

東京市神田區神保町一ノ三四  
高田壬午郎

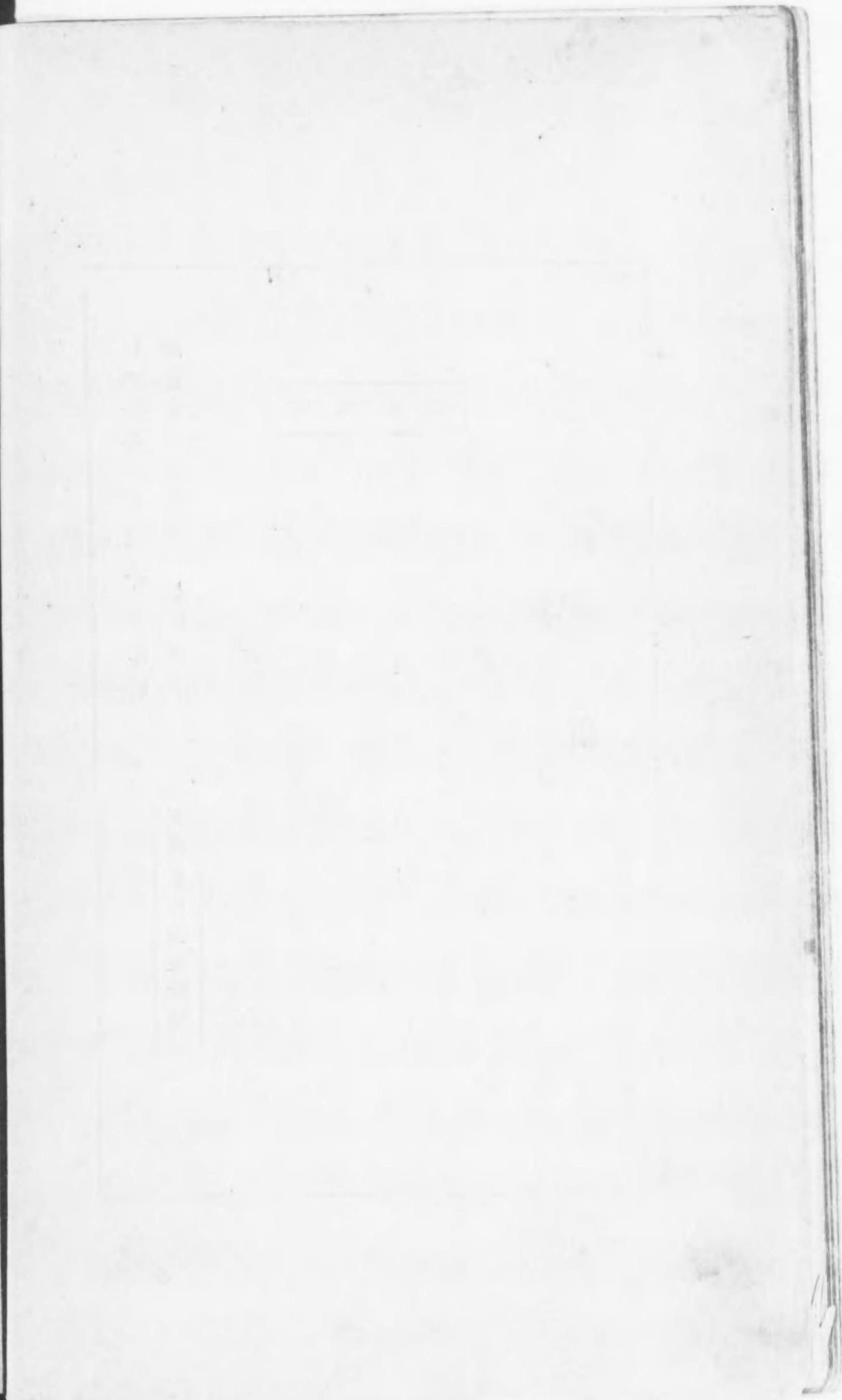
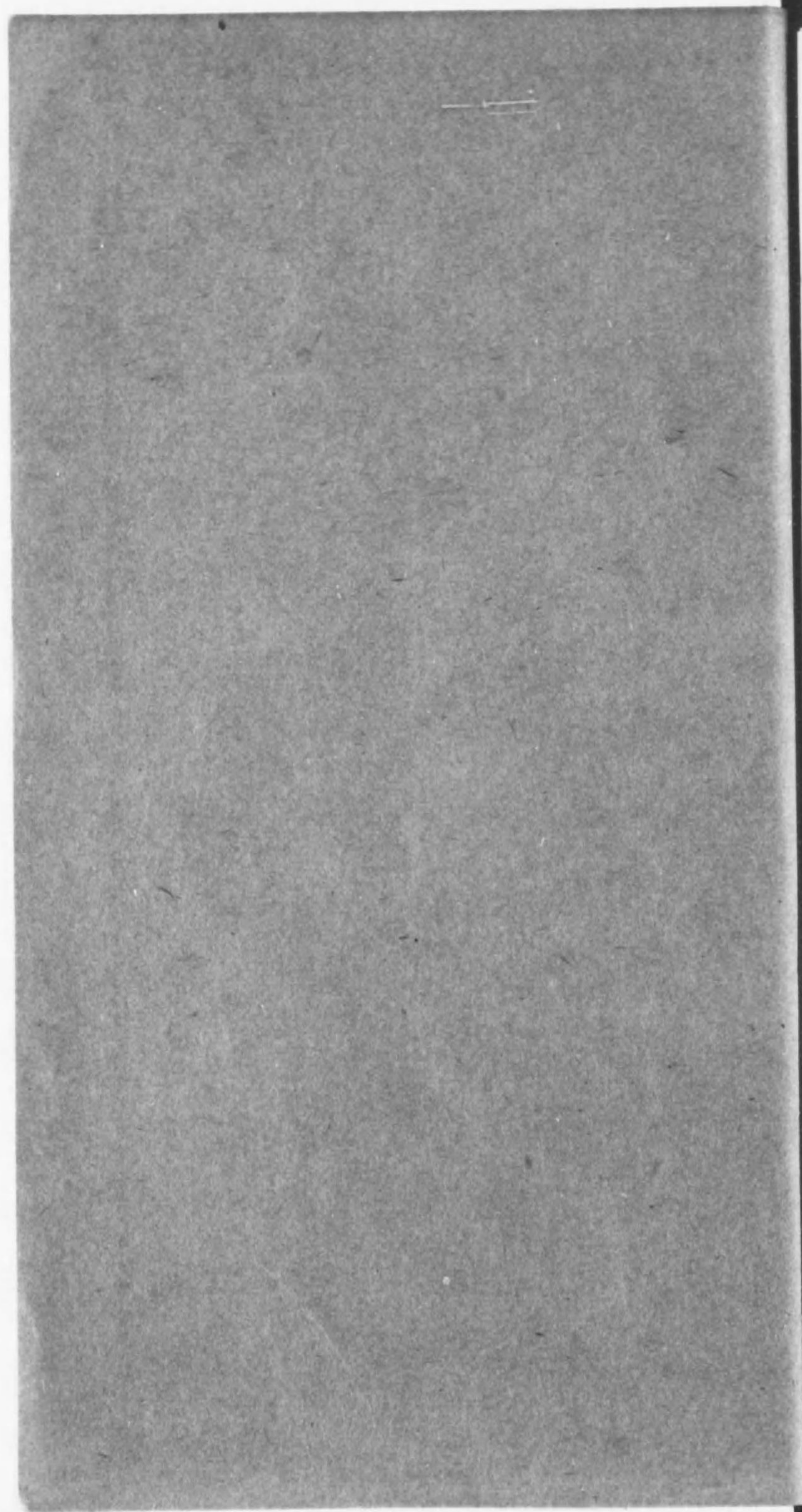
印刷所

東京市神田區神保町一ノ三四  
株式會社 開明堂

發行所

東京市豐島區西巢鴨二丁目二五三六番地  
關書院

振替東京三四三六番



終